九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

旧九州大学樺太演習林の現地調査結果について

小川，滋
九州大学農学部附属演習林

飯田，繁
九州大学農学部附属演習林

井上，晋
九州大学農学部附属演習林

薛，孝夫
九州大学農学部附属演習林

他

https://doi.org/10.15017/14828

出版情報：九州大学農学部演習林報告. 81, pp.93-130, 2000-03-30. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

九大演報（Bull. Kyushu Univ. For.），81：93-130，2000

資　料

旧九州大学樺太演習林の現地調査結果について*

小川　滋**・飯田　繁**・井上　晋**
薛　孝夫**・西村潤二**

目　次

1．はじめに
小川　滋
2．サハリン訪問の概要と旧樺太演習林の変遷
小川　滋
3．旧樺太演習林とその周辺の植生概観
井上　晋
4．サハリンにおける林業政策
飯田　繁
5．旧樺太演習林の建造物
薛　孝夫
6．一事務官の見た旧樺太演習林
西村潤二
7．おわりに
小川　滋

抄　録

九州大学演習林は，実際は，1912年（大正元年）当時の樺太演習林から始まり，続いて台湾，朝鮮の演習林が設置されている．すでに，「旧台湾演習林」，「旧南鮮演習林」については調査が行なわれており，ロシアの「旧樺太演習林」の調査が待望されていたところであるが，1年半の準備期間を経て1999年9月に現地調査が実現した．

まず，現地調査の経緯や調査日程，旧樺太演習林の変遷，旧事務所跡地の変貌など，現在のサハリンの事情をまとめた．次いで，旧樺太演習林とその周辺について，50数年経過した植生の現状と樺太演習林当時の植生調査結果および北海道の植生との比較を行って，植生変遷の実態等についてまとめた．さらに，旧樺太演習林が如何なる管理状況に置かれているかを理解するために，最近のサハリンの国有林経営・管理の実態について資料を作成した．また，九州大学施設部に保管されていた旧樺太演習林の建造物の図面を複製し，解説を加えた．

以上のように，1999年9月に行われた旧樺太演習林の調査について，経緯，訪問先，演習林の変遷，植物相，林業事情等をまとめて，将来のサハリンにおける森林・林業研究の資料とした．

キーワード：サハリン，旧樺太演習林，亜寒帯性林，植生，林業政策，借地経営

---

* OGAWA, S., IIDA, S., INOUE, S., SETSU, T. and NISHIMURA, J. : A report of an investigation on the former "KARAFUTO Forest of Kyushu Imperial University" in Sakhalin

** 九州大学農学部附属演習林
Research Institute of University Forests, Kyushu University, Sasaguri, Fukuoka 811-2415

1. はじめに

九州大学演習林では，1922年（大正11年）の糟屋演習林（現福岡演習林）の設置をもって創設としている．2002年が創設80周年ということから，その記念事業として，九州大学演習林の歴史と研究成果をとりまとめることとして，その準備を始めている．また，2000年には，九州大学ユニバーシティ・ミュージアムの公開展示として，公開することになっている．

しかし，実際は，1912年（大正元年）当時の樺太演習林から始まり，続いて台湾，朝鮮の演習林が設置されている．国際的には，国境問題，感情的問題など多くの問題があろうが，学術的には，森林の開発管理がどのような変遷をたどっていったかは，大学演習林として，きわめて興味ある問題である．すでに，「旧台湾演習林」，「旧南鮮演習林」については，調査が行われており，ロシアの「旧樺太演習林」の調査が計画されていたところであった．

「旧樺太演習林」は，日本がロシア，サハリン島（旧樺太）の北緯50度以南を領有していた時代に，九州大学がサハリン島中部に有していた演習林である．当時のサハリン島には，東京大学，京都大学，北海道大学もそれぞれ約2万ha程度の演習林を持っていた．そのころの木材資源は，きわめて価値の高い資源であり，大学の経済基盤を支える一つの財産と位置づけられていた．その後，第二次世界大戦での日本の敗戦と同時に，「旧樺太演習林」は，ソ連邦が森林開発管理を行っていたわけであるが，ソ連の国内事情同様，杳として，その実態は不明であった．最近，ソ連邦の崩壊とともに，ロシアへの旅行，調査など，かなり緩和されてきた．とはいえ，まだまだ調査の交渉，ビザの取得などには，多大の時間を要し，すでに3年前から定期的に森林調査を行っている北海道大学演習林の十分なアドバイスを受けながらも，計画してから実現するまで，約1年半かかっている．この要した時間の大半は，郵送等の通信事情によるものであり，サハリン州営林局からの招聘状は，ファックスを使用しており，その正本は帰国してから到着している．

調査団は，演習林研究部小川教授（団長），飯田教授，井上助教授，薛助教授，事務部西村会計掛長，通訳ゴルフンケリ・ミハイル（九大大学院法学研究科，修士課程1年）の6名である．訪問の相手先は，ロシア，サハリン営林局（ゲナジ・チェクルダイエフ局長）である．

なお，本資料は，調査団のメンバーが興味ある問題に関連してまとめたものであり，重複部分，表記の相違や内容の精粗なども含んでいるが，現地での印象や興味の視点の違いとして，そのまま掲載した．

2. サハリン訪問の概要と旧樺太演習林の変遷

2. 1. 行程

1999年9月6日函館出発，9月13日函館着の7泊8日の行程で，サハリンの南端から

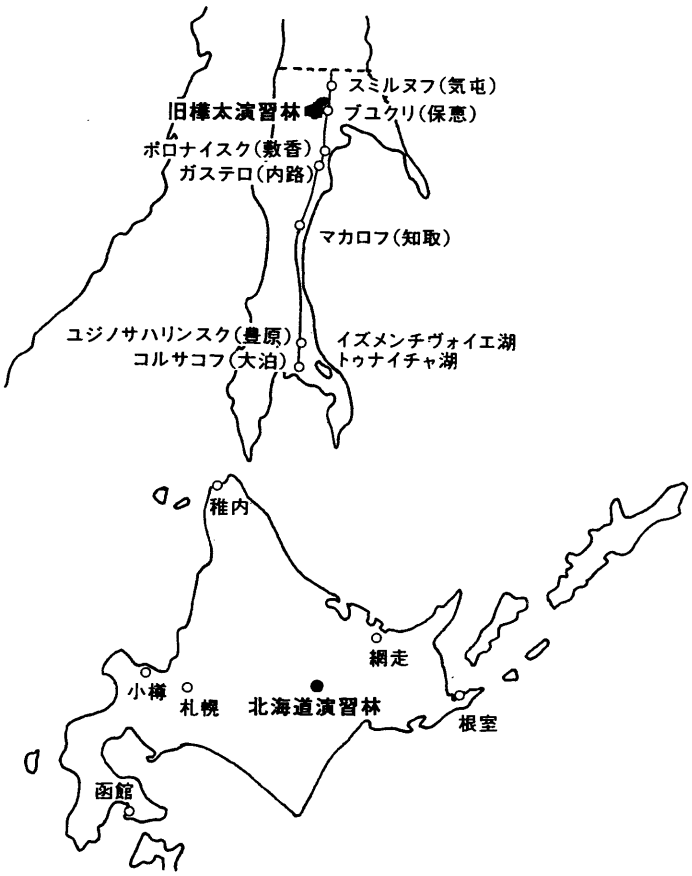

図 2-1　旧樺太演習林現地調査団の主要調査ルート

北緯 50 度近くまで，主に東海岸部を往復したことになる（図 2-1).

以下に，行程の概略とトピックを述べる.

9 月 6 日：函館空港からエアロフロート機に乗り，約 2 時間でユジノサハリンスク空港着. ホテルサハリンサッポロ宿泊，ユジノサハリンスクは，人口 20 数万人で，現在，都市集中で増加中である.

・入国の際の税関への申告調査は厳しく，団員の一人が不正申告とみなされ罰金 10 ドル徴収される.

9 月 7 日：サハリン営林局訪問（チェクルダイエフ局長，コチェルニコフ副局長，ポポフ部長による行程の説明並びにサハリン営林局管内の事業説明と質疑応答）（図 2-2).

・全行程を局長にアレンジしていただいた.

9 月 8 日：ユジノサハリンスク発の鉄道列車で，スミルヌフ（気屯）着（所要時間 11 時間半). スミルヌフ営林署のビクトル•マキシモヴィッチ•コベルニコフ署長，ラマン主任林務官の案内でゲストハウスに宿泊. この日は，列車に乗っている間，雨であった.

・スミルヌフは人口 4 ～ 5 千人程度の町. 列車は，日本の寝台車を再利用している.

図2-2 サハリン営林局でチェクルダイエフ局長らと会談

・ポロナイスク（敷香）で，自転車旅行中に4人組強盗に金をとられたという日本人若者（尾関祐介，東京在住）と会う．宿泊は，いわゆるホテルはなく，旧公務員宿舎の一室をゲストハウスとして利用したもの．スミルヌフ営林署のログハウスでの歓迎会では，パンの上に，バター5mm，その上に「イクラ」約20mmをのせたもの（最高のもてなしらしい）をウォッカのつまみとして食べる（これには，毎日悩まされる）．

9月9日：スミルヌフ営林署訪問．営林署の事業の説明と質疑応答後，ブユクリ（保恵・旧樺太演習林作業所のあったところ）へ出発．ブユクリ担当区着（自動車で30分程度），担当区主任イワン氏とともに，旧樺太演習林跡地を調査，その後，付近のツンドラ地帯を視察，日ソ平和友好戦没者記念碑と破壊されたトーチカを見学，スミルヌフの苗圃（約70ha，エゾマツとトドマツの苗木生産現場）を見学の後，旧日ソ激戦地記念碑で慰霊．

・営林署長から，孤児施設の技能訓練として製作させているエゾマツの木工品をみやげとして全員にいただく．前日ポロナイスクで会った自転車旅行の若者が現地の案内人に伴われて宿舎にきており，同宿となったが，ここは，スミルヌフ唯一のゲストハウスらしい．

9月10日：スミルヌフから自動車でポロナイスクへ（所要時間1時間30分）．ポロナイスクは，人口2万数千人で減少中，ポロナイスク営林署長ウラジーミル・スミルノフ氏の案内で旧演習林事務所跡を調査．その後，市民に開放されている海岸林を見学．

9月11日：閉鎖されている旧王子製紙工場を見学，ポロナイスクから自動車で20分程度でガステロ（内路）着．日本人木造住居跡を見学，マカロフ（知取）で，旧王子製紙工場跡（1992年閉鎖）や日本時代の神社跡（石灯籠，鳥居跡）を見学．途中，海岸で昼食（海岸へ流れ込む小渓流の鮭の遡上に感激する．しかし，密漁が横行しているらしく，イクラをとった残骸が多い）．夕刻，ユジノサハリンスクに帰着，ホテルサハリンサッポロ宿泊．

・ドライブイン，レストランなどはないので，昼食分を各自売店で購入．

9月12日：日本時代当時のままの郷土博物館，美術館を見学の後，コルサコフ（大泊）へ，日露戦争の際の日本の遠征軍上陸記念碑見学．トゥナイチャ湖，イズメンチヴォイエ湖見学．コルサコフ営林署のゲストハウスで，サハリン営林局チェクルダイエフ局長 コ

チェルニコフ副局長　ポポフ部長，コルサコフ営林署長　ルキアリンコ氏らと送別会，夜は，ユジノサハリンスクのホテルに宿泊.
9月13日：ユジノサハリンスク空港を出発，無事に函館空港に到着.

2．2．旧樺太演習林の変遷

1912年に，当時の樺太庁から約2万haの国有林を大学に所管換えして樺太演習林を設置した．その後，実地調査を行い，実際の面積を20335.5 haに確定して移管を受けた．しかし，交通不便で開発できず，森林の保護管理のみを行っていた．1925年（大正14年）に至って，「施業案」（林学の専門用語で森林管理のための基本計画）を編成して実行し，演習林の活動が開始された．また，1924年には，ガステロ（内路）に事務所，1928年（昭和3年）にポロナイスク（敷香）に事務所，ブユクリ（保恵）に作業所を建設している．1932年（昭和7年）に，「樺太演習林要覧」を作成して，大学演習林の沿革，位置・面積など，地況（地形，地質，気候など），林況（森林の状態），施業（実際の伐採，搬出，造林，保護の計画），調査・研究・試験，学生の実習などの活動内容を紹介している．学生の実地実習は，1928年から毎年夏季に行われている．当時の教職員は，助教授1名，助手1名，嘱託1名，雇員3名と記されている．

とくに，「演習林報告」第1号として，「樺太演習林に於ける植物生態調査」（植村恒三郎教授，田中祐一助手）が，1931年（昭和6年）に発刊されており，演習林の研究活動は，樺太演習林から開始されている．

森林の管理は，考え方としては現在とそう大きくは変わっていない．森林の状態に応じて，循環型の資源利用を計画している．具体的には，エゾマツ，トドマツの原生林（直径15 cm～90 cm）を主要な木材資源として，150年の輪伐期（ある区画を順番に伐採，植栽し，150年でもとの森林に戻し，循環利用する）として計画されている．それらの森林の中に，多くの試験地を設け，循環型資源利用のための研究を開始している．また，保護・防火樹帯を定め，学術的に貴重な森林を設定している．

森林の利用は，王子製紙株式会社と払い下げ契約を行い，当初はブユクリ（保恵）川で流送していたが，下流に鮭鱒孵化場があるため禁止され，新たに森林鉄道を布設して1929年（昭和4年）から搬出している．

1926年から樺太演習林は収益をあげるようになり，1935年の演習林の年収入は，支出の倍以上であって，大学の特別会計法に従い，大学の維持費の一部となり，本学の校舎建設等に多大な貢献をなした．

1945年の敗戦によって，樺太演習林を含む外地演習林は全て消滅した．その経過，研究資料などは，ほとんど残存していない．多分，相当の混乱の中で，現地の担当者は，引き揚げてきたに違いない．演習林全体も混乱しており，1945年（昭和20年）から1946年（昭和21年）まで，「演習林報告」は発行されていない．周知のごとく，ソ連邦の崩壊まで鉄のカーテンに閉ざされ，その実態は不明であった．そして，我々は，実に54年ぶりに，旧樺太演習林の地に立ったのである．

今回の訪問調査では，断片的なことしかわからなかったが，これらをもとに，戦後の「旧樺太演習林」の変遷を追ってみることにする．

ソ連では，土地はすべて国有であるので，演習林も国有林となって，サハリン州スミルヌフ営林署の管轄，ブユクリ担当区の森林となった．しかし，エゾマツ，トドマツ（直径70 cm 程度）の平地林 1500 ha を 1954 年から伐採して，国営農場，牧場として開発された．牧場では 3000 頭の牛を飼い，農場ではジャガイモを生産していたらしい．1992 年から 93 年のペレストロイカ後は，多分経営状態がよくないのであろう，放置され，現在は草地化して 200 頭程度の牛を飼っているにすぎない．

1957 年には，道路沿いのエゾマツ，トドマツ，グイマツ林が林野火災で焼け，現在は，シラカンバ等の再生林となっている．

また，農場化した奥地には，トドマツの天然更新を行っている林地がわずかに残っており，100 年生以上のトドマツや日本時代の伐根も見られた．なお，この付近一帯は伐採年数に達していないので，1971 年から伐採を行っていないということである．盗伐，林野火災も多く発生し，樹木には焼け跡も見られた．ブユクリ担当区では，盗伐監視，火災跡地の造林などを行っているが，とくに重要な仕事として，林野火災の監視をあげていた．サハリンでは，毎年 5 月から 10 月にかけて林野火災が発生し，その大部分は失火原因が，たき火，タバコの投げ捨てによるものである．ちなみに，旧樺太演習林では，「火災取締規定」を設け，たき火，タバコの管理などを厳しく取り締まっていた．

ブユクリ（保恵）の 旧演習林作業所は，1981 年 8 月のフィルス台風による土石流で流失し，作業所のあった概略の位置はわかったが，その痕跡を見つけることはできなかった．また，森林鉄道跡地も一部に盛り土が残っているだけで，枕木などの遺物は皆無であった．スミルヌフ営林署には，「盗伐スルナ」などとカタカナで書かれた当時の演習林の管理標識（図 2-3）が，5 種類 15 枚程度保管されており，今回の調査のなかで，唯一の日本時代の遺品であった．

ポロナイスク（敷香）の演習林事務所と宿舎は，聞き込み調査で，ポロナイスク商業港の一角にあったことが判明，「漁師会館」として，1976 年まで利用され，その後，1980 年に取り壊された．旧事務所跡地一帯は，港湾事務所の船体修理場，資材置場などとなっていたが，ここでも事務所等の痕跡や遺物は全くなかった．

ガステロ（内路）にあった演習林事務所は，位置さえ不明であったが，日本人が住んで

図 2-3 旧樺太演習林時代の管理標識

いた木造住居（出窓が特徴らしい）には，現在も人が住んでいる家もあり，かろうじてその面影を感じることができた．

以上のように，旧樺太演習林は，やはり長期の年月によって，施設などはすっかりなくなっていた．同様に，森林においても，農場，牧場へと開発，転換され，もっとも良好な林相とその150年という壮大な施業計画も破壊されてしまった．施設などは，自然災害による破壊や古くなれば取り壊されることは普通にあるので，もう少し早く訪問できていたらという残念な思いであった．

また，森林の開発管理は，時として社会状態，経済状態で大きく変わり，開発が行われるのも当然のことである．しかし，「大学演習林」は，調査研究，学生教育のフィールドであり，もし，九州大学演習林として連綿と続いていたならば，少なくとも，農場等への開発はなく，150年という長いタイムスパンであっても，現在，約半分の75年は成果が蓄積されているはずであり，北方林の研究が大いに進展していたにちがいない．とくに，北方林が地球の気候環境に重大な影響を与えることが判明しつつある今日，大学演習林としての使命は大きくクローズアップされてきたであろう．このことを思うと，まさに取り返しがつかないような気がした．森林に関する研究は，フィールドに依存することが大であり，そこで，今回の調査の教訓的なこととしていえば，たとえば，国家間のトラブルで，不幸な状態になっても，長期にわたる研究計画が続行できるような地球的スケールでの森林研究システムを構築することも必要であろう．

2．3．まとめ

初めてのロシア，それもサハリンという限られたところでの短い訪問ではあったが，「やはり，ソ連は崩壊したのだ」というのが実感だった．経済的にも，社会的にも混乱してるという印象が強かった．森林に関していえば，農地化，牧場化などで開発は進み，国有林は，事業予算の減少から，1997年にロシア林業法が制定され，民間企業に賃貸料をとって伐採，植栽を行っている．また，ロシアの国有林管理システムは，大統領府直轄営林省，州の営林局，地区の営林署，担当区となっている．しかし，詳しくはわからなかったがすべてが国で管理されているわけでなく，州レベル，地区レベルで，管理予算，職員の給料などを独立採算的に運営する部分もあるらしく，署長自身も，国家公務員なのか，民間人なのかわからなくなる面もあるらしい．製紙工場も経営不振からサハリンにあった7製紙工場は閉鎖が続き，現在では1工場のみが操業しているにすぎない．

サハリンの森林面積は，ほとんどが天然林で，人工林（主にカラマツ）は3%程度らしい．林業は，天然林のエゾマツ，トドマツが主要な木材資源で，日本，中国，韓国などに輸出されている．

現在，重要な問題として，林野火災が夏季に多発し，地球気候変動とも関係する北方林が減少していることである．1998年には，火災件数が350件，焼失面積8万ha，90%以上は失火で，夏季には地表面温度が50度以上にもなり，乾燥がはげしくなるそうである．

また，ペレストロイカで，国有の住宅，アパートなどは住んでいる人の私有になったそうであるが，逆に維持管理は個人で行わねばならず，かなり荒れた住宅建物が多く見受けられた．

3. 旧樺太演習林とその周辺の植生概観

3. 1. はじめに

本学の旧樺太演習林は，1912年（大正元年）から1945年（昭和20年）の我が国の敗戦に至るまで，九州大学がサハリン島中部の北緯50度線南部近くのブユクリ（保恵）に約2万haを保有していた森林である．敗戦後はソ連邦国有林時代を経て，近年のソ連邦崩壊以降は，ロシア共和国サハリン州営林局スミルヌフ（気屯）営林署管轄の森林になっている．その旧樺太演習林を敗戦で消滅してから実に54年の歳月を経て，私達演習林関係者5名が1999年9月に訪れ，かつて演習林であった林地の一部を視察できた．

本資料は，現在の旧演習林の植生状態を記録するとともに約70年前発行の九大演習林報告第1号（1931年）の研究成果や樺太演習林要覧（1932年）の記載事項および類似性の高い北海道の森林植生とも比較しながら，その変遷について触れることにする．

3. 2. 視察地の植生概況

現地視察の箇所は，ブユクリの旧演習林林地では保恵作業所跡地周辺，旧軍道と森林鉄道跡地周辺林およびトドマツ天然更新林と近傍の渓畔林の3箇所と，演習林外ではポロナイ川水系の湿性ツンドラとスミルヌフ営林署苗畑，それにポロナイスク（敷香）のグイマツ海岸林の3箇所である（図3-1）．各視察地の植生等について概説する．

3.2.1. 保恵作業所跡地周辺

この地は旧保恵川の川岸近くの標高約80mに位置し，かつては家屋が建ち並んでいた場所であったが，1981年8月に襲来したフィルス台風ほか数度の台風による土石流で流失し，土砂が堆積した氾濫原となっている．作業所の痕跡はなく，流失後に侵入・更新した先駆樹種のヤナギ類（ドロヤナギ・エゾヤナギ・キヌヤナギ・カラフトヤナギ・バッコヤナギ等）からなる樹齢15年前後で樹高4～7m，胸高直径8cmほどの低木林の中に前生樹が残存したと考えられる樹高約10m，胸高直径20～30cm，樹齢30～40年のハンノキ類（ケヤマハンノキ・ヤマハンノキ）が点生する森林が形成されている．林床植生はほとんどないが，林冠ギャップ箇所や林縁等の陽光地にはエゾヨモギ・ハンゴンソウ・ヨブスマソウ・ヤマハハコ等のキク科で先駆種草本が散生する植生となっている（図3-2）．この種の森林は北海道の川岸段丘上等に発達する二次植生に相観的に近い．

3.2.2. 旧軍道と森林鉄道跡地周辺林

この林地は標高約100mの平坦地で，旧演習林地の第12林班と第28林班の境界にあたり，現在は幹線道路が通っている箇所である（図3-3）．幹線道路脇から森林鉄道軌道敷跡が旧第28林班内に向けて現在の鉄道線路までの間約100mのみ，軌道敷盛り土が残るにすぎない．

1930年当時の林相は，林齢250～300年のエゾマツ・トドマツ亜寒帯性針葉樹原生林と

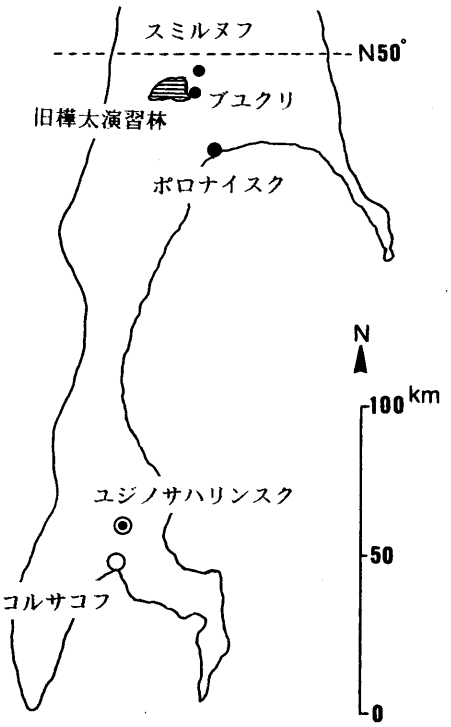

図 3-1　サハリン中部の植生視察地（●）

図 3-2　1981 年の土石流で流失した旧保恵作業所跡地周辺に侵入・更新したヤナギ類先駆種林

なっており，平均の樹高約 13 m，胸高直径約 45 cm，材積約 320 m^3 の一斉林型の森林と記録がある（植村・田中，1931）．1925 年（大正 14 年）編成の施業案により，軍道沿いは防火・防風帯として準施業制限地に編入されて伐採は行われていない（九大演習林，1932）．しかし，敗戦後のソ連時代の施業は不明に加えて，1957 年発生の大規模な森林火

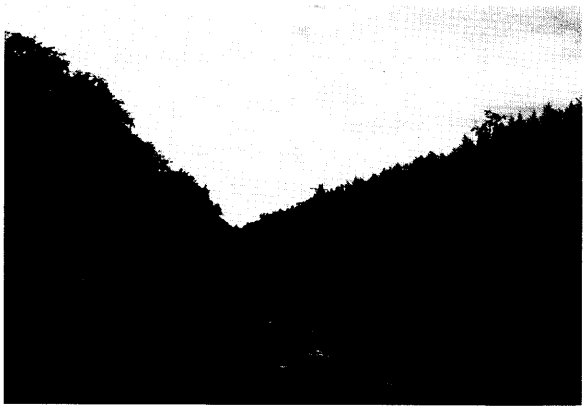

図 3-3 幹線道路の両側にグイマツ山火再生林が広がる．道路左側がかつての演習林第 12 林班，右側が第 28 林班

図 3-4 かつての森林鉄道軌道敷跡地に侵入・更新したヤナギ・ハンノキ類先駆種林，旧第 28 林班

災により焼失，現在はその後に天然更新したグイマツが山火再生林として，樹高約 10 m，胸高直径 30 cm 前後の純林を形づくっている．このグイマツ林の中に森林鉄道跡地が存在し，昔の軌道敷沿いには保恵作業所跡地と同じ，ヤナギ・ハンノキ類が樹高約 7～8 m の低木林を形成している．林床植生は比較的に多く，ヨブスマソウ・オオチシマトリカブト・オオハナウド・オオブキ・ホザキナナカマド・カサスゲ等の高茎草本型植生が多い．この種の森林 は北海道の低湿地の二次林植生に多く見られるタイプである（図 3-4）．

3.2.3. トドマツ天然更新林と近傍の渓畔林

この林地は標高 106～240 m に及ぶ広大な緩傾斜地で，旧演習林の第 14 林班に位置する．一帯は幹線道路から東側の背梁山地山麓までソ連時代に森林伐採が行われ，国営農場の牧場・採草地として開発され今に至っている箇所であり，旧 14 林班はその一部になっている（図 3-5）．

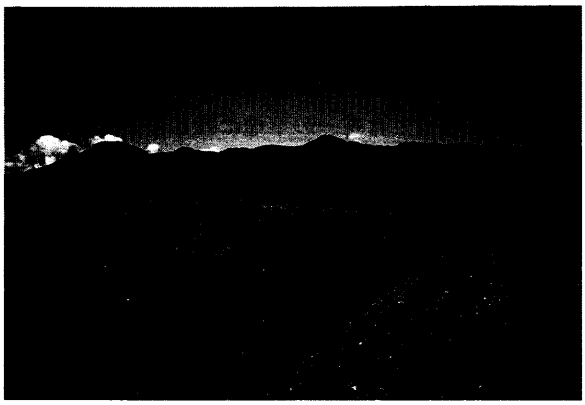

図 3-5　旧演習林林地はソ連時代に皆伐され国営農場に開発された．旧第 14 林班付近から奥地背梁山地を見る

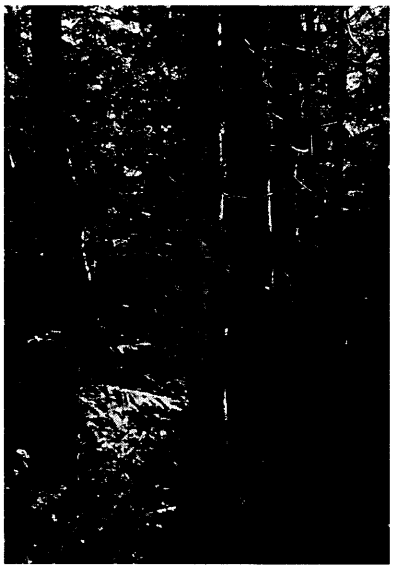

図 3-6　トドマツ天然更新林の林床は暗く，局所的に稚幼樹が光斑箇所に集中して発生していた

図 3-7　ミヤマハンノキとヤナギ類を優占種とする渓畔二次林は，北海道の亜高山帯の沢沿いに見られる植生に近い

かつての林相は，エゾマツ・トドマツ原生林の優良林分として施業案では普通施業地に編入されていた．ここでは輪伐期 150 年，回帰年 30 年とする択伐作業が行われていた（九大演習林，1932）．この作業法研究は，原生林からの木材収穫に保続性を持たせるために，幾つかの大きな択伐区域に分けた作業級全体を 150 年かけて伐採一巡させると同時に，作業級内を 30 個の択伐区に分け，これを毎年 1 区ずつ択伐して 30 年で一巡させる施業である．旧演習林の大部分の林地が農地に転換されたので研究成果も同時に消滅したが，農場の奥地に局所的にトドマツの天然更新林と渓流沿いにミヤマハンノキの渓畔二次林植生

が残されていた.

トドマツ林は林齢100年足らずで，標高200 mの平坦地に成立しており，演習林時代の伐根がまだ腐らずに残っていた．高さ1 m以下の天然更新したトドマツ稚幼樹が部分的に集中して生育しており，付近では唯一の平地に残る亜寒帯性常緑針葉樹林の片鱗といえる．樹高11～13 m，胸高直径30～40 cmの中径木が主体の壮齢林で，アカエゾマツを僅かに混生している．案内の林務官によると，120年以上を伐期齢に定めているので，まだ20年間程度はこのままの状態で保全管理するとのことであった．林内は暗く，林床植生はトドマツ稚樹とエゾゴゼンタチバナがパッチ状に群落をつくるほかは，ほとんど他の植物は生えてなく，相観的には北海道の阿寒国立公園内のトドマツ天然林によく似た林相に見えた（図3-6).

渓流沿いの標高180 mの平坦地に分布する先駆樹種のミヤマハンノキ林は，樹高7～8 m，胸高直径15～20 cm，林齢約25年ほどの二次林でほぼ純林状を呈しているが，川岸付近はキヌヤナギ・エゾヤナギ等のヤナギ類が優占する箇所も見られる．林床植生はオオブキ・エゾトリカブト・オオカサスゲ等の水湿地を好む高茎草本が主体を占めている（図3-7)．この種の森林は北海道の高標高地の亜高山帯性の渓畔林や土石流跡地によく見られる二次林植生とほぼ同一である.

3.2.4. ポロナイ川の湿性ツンドラ植生

この地はブユクリの北東約10 kmに位置し,ポロナイ川水系一帯の低湿地に分布する広大な面積の湿性ツンドラ地帯の一角で，標高約40 m程度である（図3-8)．この植生は旧演習林内では第26～30林班の保恵川と神居沢との間の下流域にも存在したと記録されている（九大演習林，1932)．ツンドラは寒冷湿潤地のために植物遺体が分解せずに厚く腐植堆積層をつくり，内部が著しく泥炭ポドゾル化した層の上に，ツツジ科やカバノキ科の低木類とカヤツリグサ科や蘚苔類からなる特有のツンドラ植生が発達する．植生はホロムイツツジ・エゾイソツツジ・オオバコケモモ・ホロナイカンバ・ヤチヤナギ・スゲ類等が優占し，所によっては，貧栄養のため成長不良の樹形をしたグイマツ・アカエゾマツ・ト

図3-8 ポロナイ川水系の低水湿で貧栄養地帯に分布する湿性ツンドラ植生

ドマツ・コバノシラカンバ等が点生する箇所も見られる．

3.2.5. スミルヌフ営林署苗畑

この地はスミルヌフの北方，北緯50度線近くに存在し，管内に植栽する造林用苗木を生産・供給する苗畑で，面積は約70 haを有する．生産する苗木はアカエゾマツとトドマツの2種で，播種から苗高20 cm以上に成長する5年生まで育苗し，その後に山出しする作業が行われていた．苗床は3～5 haに及ぶ広大なもので，ブルドーザーによる苗床造成と床替え等も機械力を用いた大規模なもので，年間1 ha当たり120万本の苗木を生産するという．しかし，実際には発芽率や得苗率はあまりよい成績ではないようであり，また経費不足のために保育作業は粗放で，育苗期間の除草作業等はほとんど行われずに掘り取り山出しされるとのことであった．ここではサハリンの主要造林樹種であるカラマツ類（シベリアカラマツ・ニホンカラマツ）の苗木生産は行われていない．

3.2.6. ポロナイスクのグイマツ海岸林

この地はポロナイスク市街地の北東に存在する海岸砂丘上の標高10 m前後に成立しているポロナイスク営林署管轄のグイマツ天然林で，海岸保安林にも指定されている（図3-9）．グイマツ林は平均で樹高約10 m，胸高直径30～40 cmで，別名シコタンマツともいわれ貧栄養地でも成育でき，しかも耐塩性を備えた先駆性落葉針葉樹である．また林床には，樹高約1.5 mの天然生のハイマツも生育して二段林型をつくっている．林内の所どころには野外レクレーションによるゴミの散乱も見られた．森林内部の空き地には，保安林の機能維持のためにヨーロッパアカマツとトドマツが樹下植栽されているが，生育不良でブッシュ化した箇所が多かった．ハイマツが砂丘上に分布する亜寒帯性の海岸植生は，後ほど訪れたサハリン南部のコルサコフ（大泊）東方に位置する，オホーツク海に面した汽水湖のイズメンチヴォイエ湖の砂丘に存在したが，北海道には見られない植生である．

図3-9　ポロナイスクの海岸砂丘上に天然更新で成立したグイマツ林は，林床に天然生のハイマツを伴う特異な亜寒帯性海岸植生を形づくっている

3．3．まとめ

今回はじめてサハリン中部の森林植生に接し強く感じたことは，東アジア北方圏に属する海洋島特有の亜寒帯性針葉樹林がソ連時代からの乱伐の結果，ほとんど原生林状態で残った所がなく，伐採跡地に造林されたカラマツやトドマツの生育状態もあまり良好とはいえず，無立木地化した箇所や造林すら行われずに放置されている所も多く存在する実態である．夏期が短く冬期の気象条件が特に厳しい サハリンにあって，経済性と効率性優先からと思うが，なぜ択伐を取り入れずに皆伐にするのか，造林木の成林のための充分な試験研究がなされ，その成果が森林造成に生かされたとも考えられず，大いに疑問を持つものである．地球環境保全の上からも亜寒帯の針葉樹林（タイガ）の重要性が問題になっている現在，これ以上の天然林皆伐は止めてほしいと思うのである．また植生学上でもヨーロッパからシベリア・サハリンを経て北海道まで延びたタイガは世界的に貴重な植生となっており，今日その保全が叫ばれているのである．ロシア共和国の上級の森林・林業監督官庁は大陸性のタイガと異なり海洋性で生物多様性を持ったサハリン固有の針葉樹林の回復についての新たな試験研究と事業を早急になされんことを切に望むものである．

3．4．引 用 文 献

植村恒三郎・田中祐一（1931）：樺太演習林に於ける植物生態調査，九大演報1，pp.1～94
九大演習林（1932）：樺太演習林要覧，九州大学，福岡，46pp

4．サハリンにおける林業政策

4．1．行政の仕組み

ロシアの森林は今なお国有の形態をとっている．連邦の森林省がこれを統括する．各州に営林局が置かれ，森林省の指令（法律）に基づき，地域の森林管理に責任を持っている．サハリン州にも一つの営林局が配置されている．

営林局の主要な任務は，森林を管理・育成すること，国有林を有効に利用し，ロシア経済に資することにある．現在，サハリン州には20の営林署が置かれ，約1000名の職員が働いているという．一営林署の森林管理面積は平均で約34.5万haであり，日本の営林局ほどの広さである．営林署の下に担当区に相当する組織が置かれている．担当区が末端の組織となっている．

ロシアの国有林は職員の採用方法が日本と著しく異なっている．例えば，本省は営林局長及び一部の局幹部を任命し，営林局長は営林署長を任命する．そして営林署長は職員（オフィスの職員と作業員）を任命（採用）する，という構造になっている．

4．2．森林の構造

サハリン営林局が管理する森林は約690万haである．その内訳は，樹木のある土地が約550万ha(80%)，森林に分類されているが樹木の生えていない土地が約70万ha（10%)，森林でない土地が約70万ha（10%）という構成である．

表4-1　植林等に関する推移（単位：千ha）

	1992	1993	1994	1995	1996
人工更新	10.7	9.8	30.1	30.3	19.1
天然更新（手を加える）	5.2	3.8	9.9	11.4	10.0
植林地の保護	3.7	3.5	6.7	7.8	5.3
天然更新（手を加えない）	1.8	2.5	13.5	11.1	3.8

表4-2　森林火災の推移

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
面積（千ha）	1.06	0.15	0.18	7.90	1.71	0.20	0.30	5.60	(80,00)
件数（件）	79	31	26	87	13	30	35	60	(350)

森林を構成する主な樹種はカラマツ160万ha（29%)，ヨーロッパトウヒ120万ha（22%)，トドマツ90万ha（16%)，グイマツ100万ha（18%)，シラカンバ類10万ha（2%)，その他70万ha（13%）である．

最近における森林の手入れ状況は表4-1のようである．意外に人工更新が多い．そのためかなりの苗畑面積が用意されていた．また，サハリンにおける森林管理にとって山火事がもっとも深刻な課題の一つとなっている（表4-2)．1998年の火災は特にひどく，350カ所から出火し，約8万haの森林が火災に遭ったという．そのため国連の環境問題の調査団がサハリンの実態を視察した．サハリンの夏の気温は地表温度が摂氏50度（1998）にも達し，マッチ1本で容易に火災になるという状態だったというのである．

4．3．最近の動き

周知のように旧ソ連はペレストロイカによって多くの国営企業が非能率のために閉鎖された．その結果，社会主義的な経済システムが崩壊し，非社会主義的なロシアの誕生へと突き進んでいった．その過程でサハリンの製紙工場（7工場）はほとんど生産が中止され，そのシステムが解体された．その多くは廃墟となってしまい，現在，わずか1工場が操業するのみだという．

この経済危機によって，営林局では予算が削減され，雇用数が大幅に減少した．他方，

自然保護に対する要請は強まり，義務だけが強まりつつある．森林管理の難しさが加速しているのである．

経済改革の本質は私有化であり，従来のような国営企業が国家予算で保護される仕組みは無くなった．ペレストロイカを通じ，製品の品質が重視されるようになり，州内の様々な工場や企業は急速に衰退し，閉鎖を余儀なくされていった．前述した製紙工場の場合，1992年頃に閉鎖されるのであるが，そこで使用された機械・施設類は，その根幹部分が戦前の王子製紙の設備であったという．50年前の古い施設や機械を使用し続けたわけで，工場が閉鎖されるのは必然的なことだったのである．ただ，工場閉鎖がマイナス面ばかりをもたらしたわけではなかった．既存のパルプ工場はひどい公害の発生源であり，漁業に悪い影響を与えていたという．その製紙工場が潰れ，漁業が回復したことを喜ぶ国民も少なくないというのである．

ところで，1991年に270万m^3の生産量を記録していたサハリンの国有林は，州内の林産工業の衰退に伴って，急速に縮小していく．また，同年における輸出も約12万m^3程度行われていたようであるが，それも次第に減少していった（表4-3）．

1998年におけるサハリン州の伐採量は約60万m^3である．1999年には100万m^3の生産が見込まれ，その内30万m^3は輸出用だという．最近，少し経済事情が良くなっているようであるが，その背景には，2年前(1997)に林業法が改正され，国有林の経営システムが大幅に改善されたことが関係している．

表4-3 木材輸出量と販売収入

	1991	1992	1993	1994	1995	1996
輸出量（千m^3）	107	110	116	88	44	48
販売収入（百万ルーブル）	8,116	8,393	8,792	6,719	3,334	3,644

現在の国有林経営には，基本的に二つのシステムが併存している．一つは直営方式の経営であり，他の一つは民間企業による借地方式の経営である．

借地方式は古くから存在したようであるが，経過はわからない．2年前までは借地期間が49年間であった．それは営林局にとって長すぎ，非常に不都合であった．悪く解釈すれば，その間に森林資源を食いつぶすことも可能だったのである．そのため，現局長はそのような長期の借地方式を廃止し，借地期間を5年間に変更した．そして5年ごとに見直しを行う制度を採用したのである．つまり，営林局に都合のよい結果が示されれば，その業者と更に5年間の借地方式を採用出来るように改めたのである．

現在，サハリン州内で38の業者がこの借地権を獲得し，国有林内で林業経営を行っている．その面積は約200万haだという．サハリン州森林の3分の1程度がこの方式によって経営されているということになる．また，鉄道沿線の森林状態（幼齢林がほとんどで，伐採できるような大径材は見られなかった）から推測すると，この200万haの森林にはサハリン州の優良な資源のほとんどが含まれているのではないだろうか．

借地業者は大体において木材加工業者であり，競争入札によって業者が決まるという

(完全競争ではないようだが). また, これらの業者の予定伐採量は 1999 年の場合 150 万 m^3 だというから, サハリンの木材生産はほとんどがこれらの業者に依存していることになる. なお, 伐採跡地の植林も義務づけられていることが多いようで, 1998 年における植林面積 4220 ha の内約 1000 ha がこの業者によって実施されたという.

借地方式の収入は, 4 割が連邦政府に, 6 割が州政府に配分されることになっている. 州政府は人工林計画を立て, それに基づいた造林を行うように営林局に要請している. しかし, それに必要な予算は計画達成に 4 億 5 千万ルーブルが必要であるのに対し, 配分される予算額は 8 千万ルーブルしかないという状況にある. このことは資源の再生が出来るような裏付けがないということを示しているのではなかろうか.

4. 4. 現場の状況

4.4.1. スミルヌフ営林署

旧九大樺太演習林を管理の一部とする地域の営林署である. 営林署長は局長によって任命されるが, それ以外の職員は署長が採用する. 従って営林署長の方針は地域の雇用に重大な影響を与える.

旧演習林の第 9, 12, 13, 14 林班は国営農場として開墾された. その隣接の林班の一部も国利農場として利用された形跡があった. 国営農場の面積は約 1500 ha で, 最盛期には 3000 頭の牛と 400 ha のジャガイモ畑があったという. ペレストロイカ (1992〜93 年頃) によってこれらの国営農場が破産し, 3 つの会社に分割された. その一つが現在約 200 頭の牛を飼育し, 30 ha のジャガイモ畑を経営しているという. しかし, 見える範囲には牛やジャガイモ畑は確認できなかった. 放棄された放牧地は一面の草原となっており, 所々に 3〜4 m の樹高のカンバ類が防風林のように列状に生えていた (図 4-1).

4.4.2. ポロナイスク営林署

ポロナイスク営林署の管理面積は 25 万 ha, 3 担当区を擁し職員数は 205 名 (臨時を含む) である. 3 つの会社に約 16 万 ha の借地権を与え, 借地方式の経営を実施している. 契約では年間伐採量が 7.2 万 m^3, 年間天然更新面積が 600 ha である. また, 営林署の直

図 4-1　旧第 14 林班から東を見た風景. 手前の草地は旧第 12〜14 林班

営方式の経営では主伐は行わず，間伐だけで約 4000 m^3 の木材を生産している．毎年の植林面積は 250～300 ha だという．

伐採許可料は 1 m^3 当たり 35～36 ドルで，これが低い方の価格（地方で利用する木材の価格）であり，国際商品となるような木材は丸太で 120～130 ドルである．年間販売収入は 140 万ルーブルで，職員の給料や作業員の賃金は完全に支払われている（これが署長及び局長の誇りとするところである）．

4．5．感想

借地方式の経営はサハリン国有林を活気づけている．一般の企業は，機械の質が悪く，その結果，製品の品質も悪いという悪循環に陥り，日本などから新品の機械を導入しなければ，国際競争に耐えられるような商品は生産できない．しかし，機械類を輸入し，新しい工場を造るためのは多大なコストが掛かるため，安い賃金に依存するしか方法がない．そういう視点で賃金を見ると，月額 1 万円程度の例が多い．それでも企業倒産が多く，失業者が溢れ，物乞いも多くなっている．子供達がレストランの前で物乞いする姿は可哀想であり，発展途上国のような印象を受けた．しかし，発展途上国ではモラルがないのに対し，ロシアはまだ一定の節度があり，落ちぶれてはいない，やはり先進国の一つであると感じた．

ところで，営林局・営林署には予算が不足していると言いつつ，しかし，活き活きと活動している．サハリンで景気がよいのは石油と漁業と林業だという．いずれも資源産業である．何故それらが活発か，それは国際商品を生産し，日本や韓国等が主要な販売先だからである．それだけでは活き活きさ加減を説明できない．推測になるが，その秘密は借地方式の経営にあるのではなかろうか．借地業者は契約によって林道開設や植林などをしなければならない．それは契約に謳ってあるというから当然であるが，自動車やガソリンさえも（現物で），伐採業者から得ているようである．従って，予算不足と言いながら，給料は完全に支払われ，日本製の 4 輪駆動車も活躍している．では，どうしてそのような収入を得ることが出来たのであろうか．その秘密は木材が二重価格（国内価格と国際価格）で販売されているという点や価格決定メカニズムにあるのではなかろうか．要するに，予算不足分を補塡するために予め価格を安く設定し，差額を自動車やガソリン等で補塡しているのではないか，という疑問である．役人の幹部が私腹を肥やさねば，円滑な経済運営をするためのやむを得ないシステムということになろうが，発展途上国におけるような私腹を肥やすシステムであってはならないのである．発展途上国の場合，高級役人の腐敗が森林官を森の破壊者たらしめる要因となっているが，ここサハリンにおいてそのような状況にならないで欲しいと願うものである．

5．旧樺太演習林の建造物

5．1．はじめに

1932年（昭和7年）発行の樺太演習林要覧の口絵には，ポロナイスク（敷香）にあった樺太演習林事務所とその内部，及びブユクリ（保恵）にあった樺太演習林作業所の写真が掲載されている．我々はこれら九州大学が建造した建物が残存しているかも知れないという期待をもって現地を訪ねたのであるが，残念なことに，いずれの建物もその基礎すら確認することができなかった．帰国後，九州大学施設部の保存書類の中にこれらの建築設計図が残されていることがわかったので，この機会に図面資料をまとめて，現地での探索の経過と共に記録しておくこととした．

5．2．旧樺太演習林の建造物と設計図書類の概要

九州大学旧樺太演習林は1912年（大正元年）の設置以降，当初の12年間は森林の保護管理のみを行っていたが，本格的な森林施業を始めるに先立ち，1924年（大正13年）にガステロ（内路）に事務所を建設し，その4年後の1928年（昭和3年）には北東に16 km離れたポロナイスク（敷香）に事務所を新築した．いずれも現地演習林からは約50 km離れた海岸の町である．

王子・富士製紙関連の私鉄，樺太鉄道株式会社がドリンスク（落合）からマカロフ（知取）までの鉄道を開業したのが1927年，マカロフからポロナイスク（敷香）まで75 kmを延長開業したのが1936年であるから，事務所新築や移転の頃は鉄道の便は無かった．事務所の機能移転は陸上交通の便と言うより，製紙工場や港湾施設との連携上の利点からであったのだろうか．ポロナイスクに事務所を新築した1928年にはブユクリ（保恵）にも作業所を建設している．また，1931年（昭和6年）にポロナイスク（敷香）の事務所に標本室を増築しているが，この増築をもって樺太演習林の建造物の整備は一応の完了とみなされたようである．

九州大学施設部にはこれら4件の建築設計図が残されている．いずれも青焼き複写のできる薄い和紙に烏口で墨入れされた図面で，訂正個所は和紙を切り抜いて同質の和紙をごく細い糊代で貼り付けるなど，作図の繊細さは目を見張るばかりである．当然のことながら寸法の単位は間と尺で，昭和6年5月に作図された標本室増築の設計図には横書きの図題枠がスタンプされているが，それ以前の3葉の図題は図面右側に縦書きに墨書されている．建物位置図など敷地や周辺の状況についての情報は充分でなく，現地で位置を特定する参考にならないのは残念である．

5．3．各建築物の概要

5.3.1.　ガステロ（内路）に作られた最初の事務所（1924年）

設計図の図題は「九州帝国大学農学部附属樺太演習林事務所新築設計図」となっている．

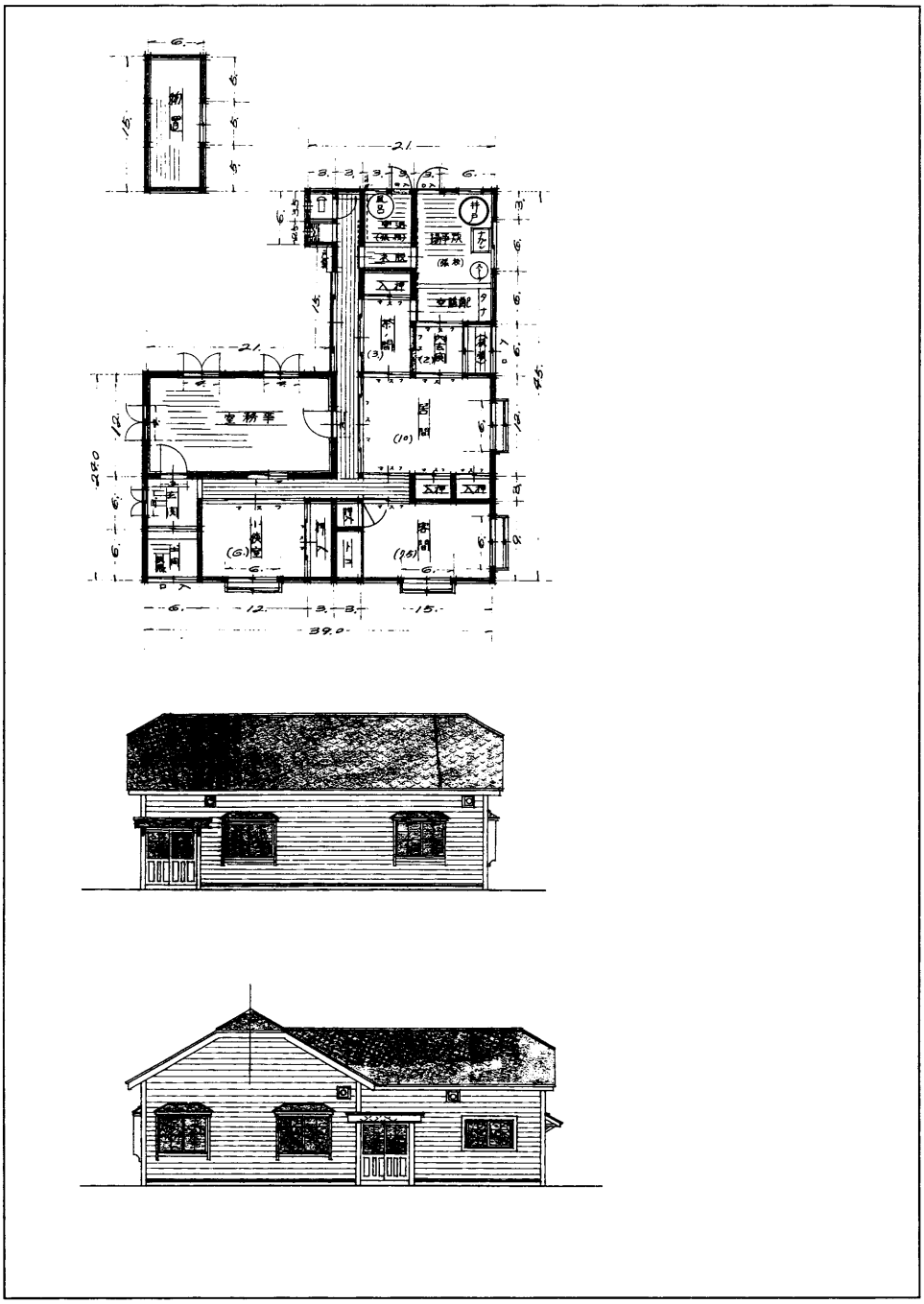

図5-1 ガステロ（内路）に建てられた最初の事務所

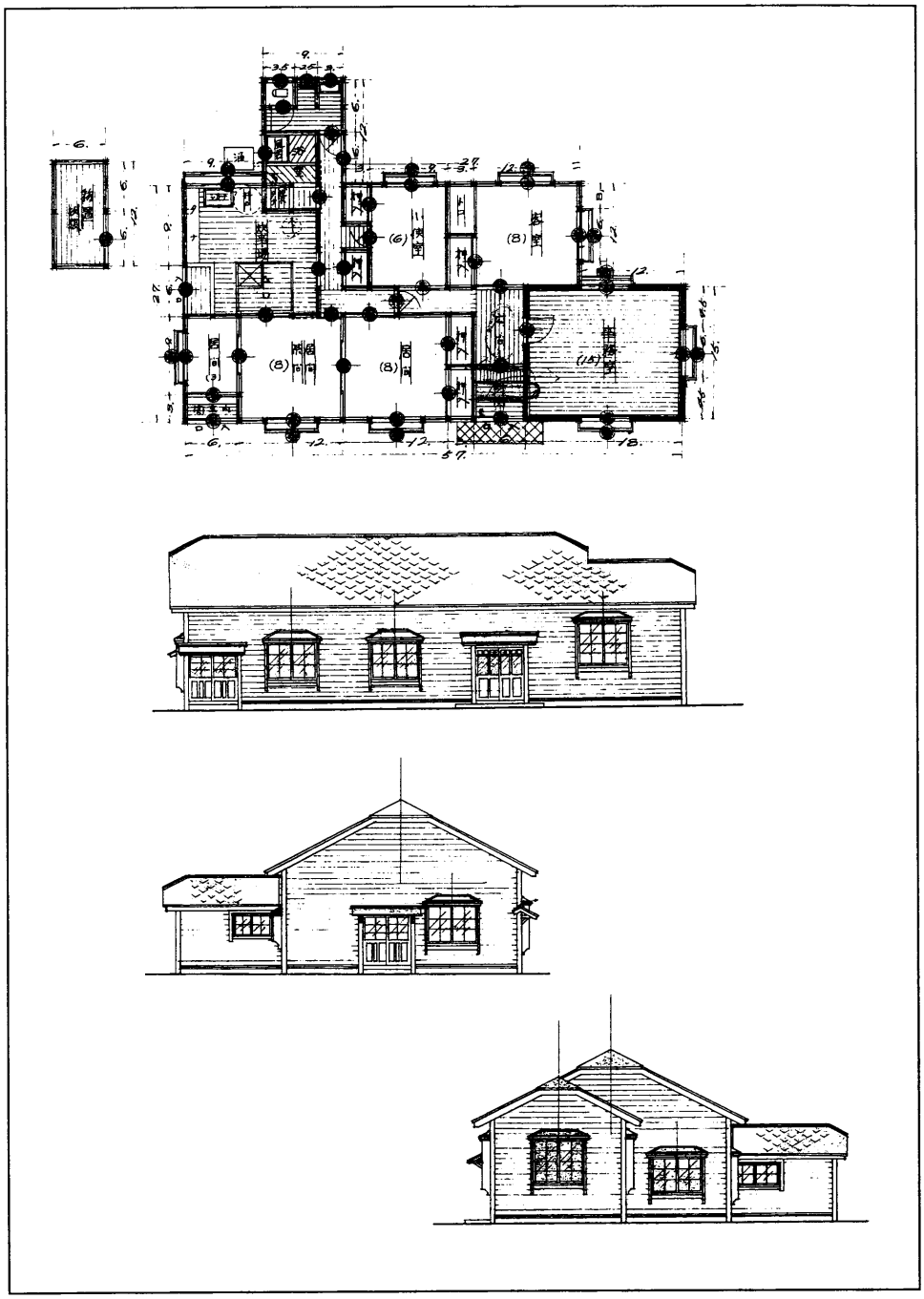

図5-2　ポロナイスク（敷香）の事務所

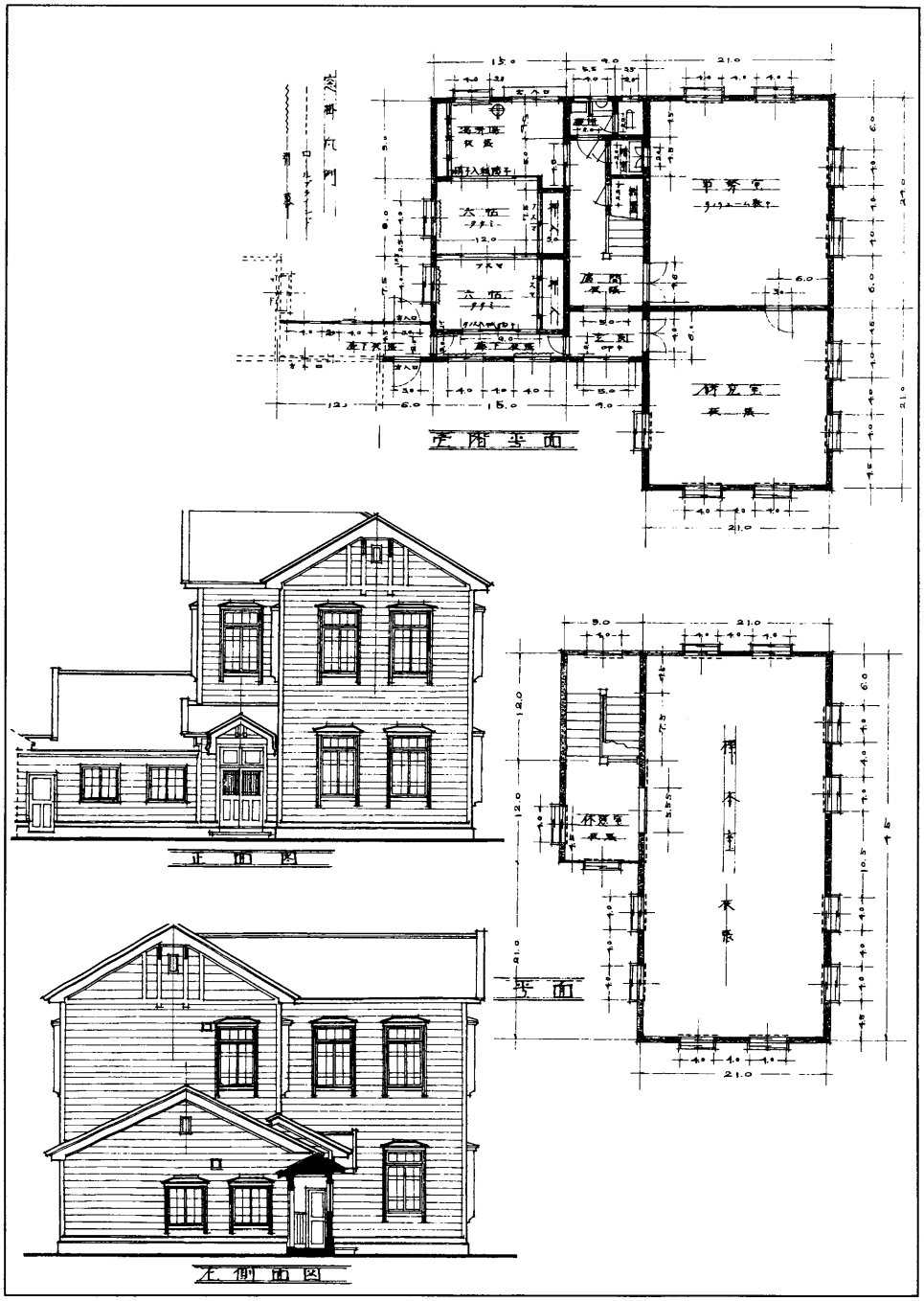

図5-3 ポロナイスク（敷香）事務所の標本室

木造平屋建て 89.1 m² (27 坪) で，屋根は半切り妻のスレート葺き，外壁は南京下見の板張りであったようである．23.1 m² の事務室，玄関，今は死語となった小使室など 46.2 m² が公的な空間で，これに一世帯分の居住空間が付属しており，別棟の 8.25 m² の物置がある．

玄関，内玄関とも土間が板張りになっていること，炊事場の内部に井戸があること，側面図にストーブ煙突用のめがね石がきっちり書き込まれていること，主要な窓は二重の出窓になっていること等が極寒の地の建築らしいところといえる (図 5-1).

5.3.2. ポロナイスク (敷香) の事務所 (1928 年)

上記と同じ技術者によって設計されたもので，構造，屋根，外壁などの仕様はガステロ (内路) の事務所と全く同じだが，137.8 m² (41.75 坪) とやや大きくなっている．事務室等の公的空間に一世帯分の居住空間が付属していることは前者と同様で，事務室がやや広くなり，公的空間に 8 畳の客室が追加されている．炊事場に「ムロ」の表記があるが，これは北国特有の地下の食品貯蔵室で，ブユクリ担当区イワン主任のお宅でも見ることができたし，北海道演習林のかつての職員宿舎にも設けられていた (図 5-2).

5.3.3. ポロナイスク (敷香) 事務所の標本室 (1931 年)

図題は「九州帝国大学農学部附属樺太演習林標本室及研究室新築工事設計図」である．木造二階建てで，155.1 m² (47 坪) の 1 階には事務室と研究室の他，来客の宿泊室と思われる和室が 2 室と湯沸かし室などがあり，106.4 m² (32.25 坪) の 2 階には 86.6 m² の標本室がある．事務所に増築されたもので，外壁のデザインは事務所と合わせてあるが，窓を縦長の出窓で統一し，屋根は一方を寄せ棟，もう一方を切り妻にするなど，やや西洋風を強調した外観になっている (図 5-3, 図 5-4).

ポロナイスク (敷香) の演習林事務所及び標本室の建物は，戦後のある時期から 1976 年まで「漁師会館」として利用されていたらしく，この建物でダンスなどをしたことがあるという老人に出会った．その老人の記憶では 1980 年頃に解体されたようである．その

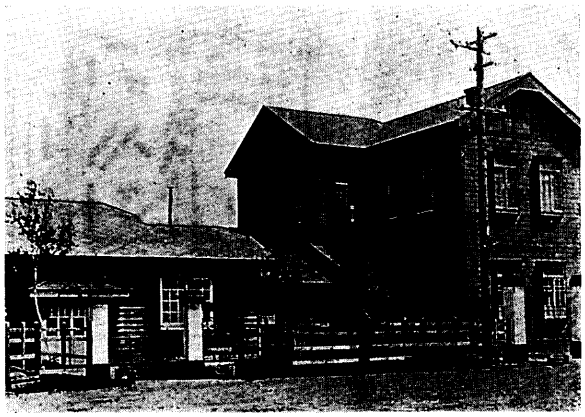

図 5-4　樺太演習林要覧 (1932) に掲載された標本室増築後のポロナイスク (敷香) 事務所の写真

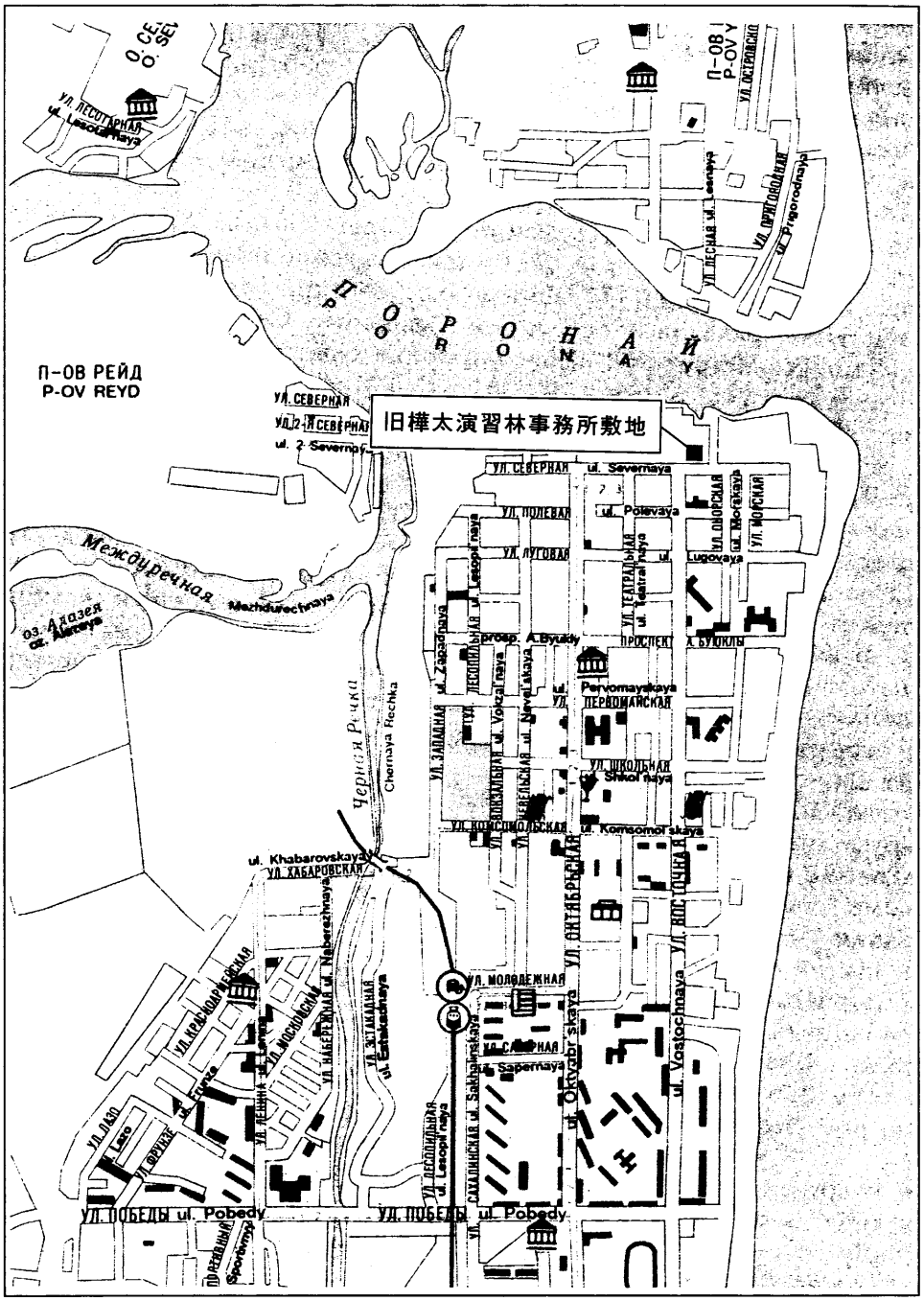

図5-5　ポロナイスク（敷香）の樺太演習林事務所の推定位置

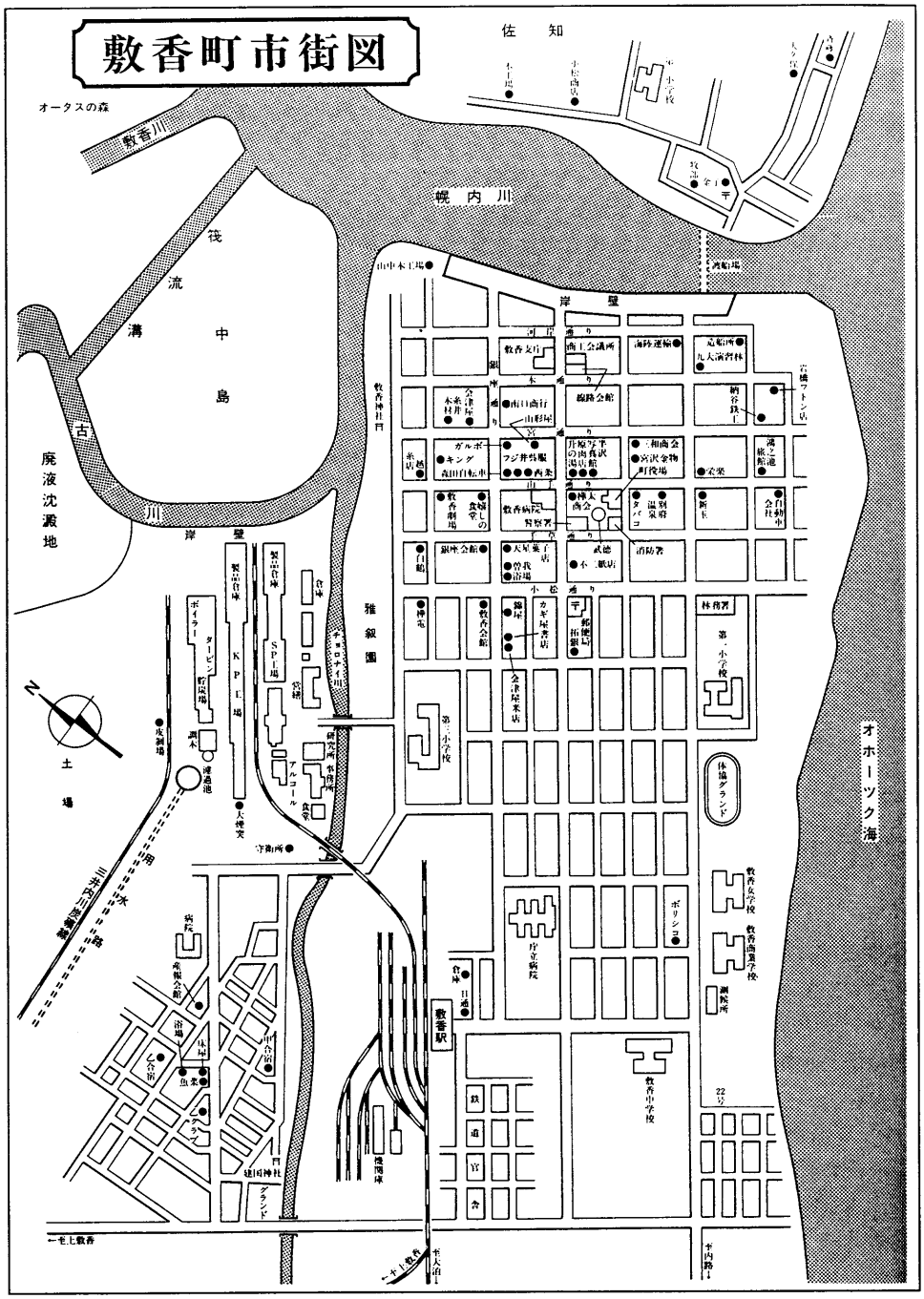

図 5-6　国書刊行会(1981)による昭和 10 年前後の様子と推定されるポロナイスク（敷香）市街図

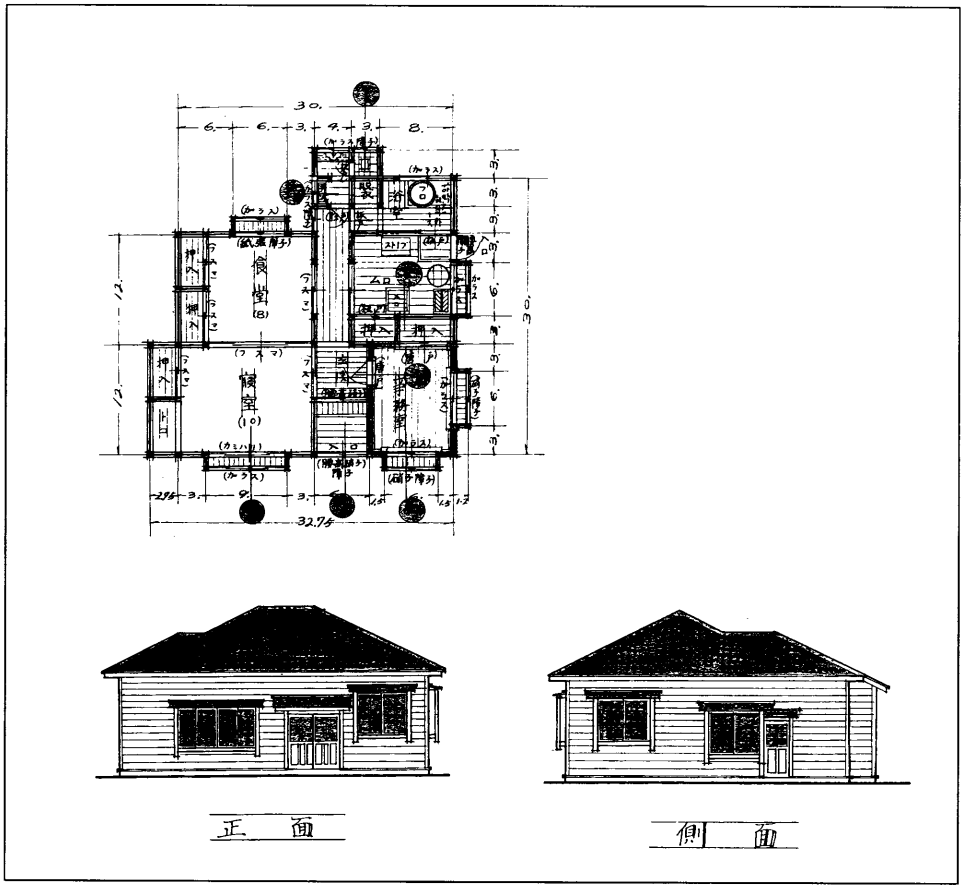

図5-7 ブユクリ（保恵）作業所

敷地は現在は港湾施設となっており，位置を特定することもゆかりの遺物を見つけることもできなかった．

ポロナイスク（敷香）の当時の街区図が残っており，現況と照らし合わせると事務所敷地の位置を推定することができる（図5-5，図5-6）．

5.3.4. ブユクリ（保恵）作業所（1928年）

設計図の図題は「九州帝国大学農学部附属樺太演習林保恵合宿所新築設計図」となっている．木造平屋79.2 m²（24坪）で，屋根が寄せ棟である他はそれまでの事務所の建築と共通の仕様である．事務室は9.9 m²（3坪）と狭い．ムロを持つ炊事場は9 m²（2.75坪）のスペースしかなく，10畳と8畳の続きの和室には寝室，食堂の表示がある．この間取りからは，管理人が常住するのではなく，最大5〜6人が一定期間だけ寝泊まりできる施設として作られたように思われる（図5-7，図5-8）．

図5-8　樺太演習林要覧（1932）に掲載されたブユクリ（保恵）作業所の写真

5．4．設計者および同時期の木造建築

5.4.1.　設計者

九州大学工学部が創設された1911年（明治44年）当時までは，建築の設計は文部省建築課で行われていたが，同年11月に九州帝国大学臨時建築掛がおかれ，農学部が創設される1年前の1918年（大正7年）には，臨時建築掛が廃止されて九州帝国大学建築課が設けられている．農学部創設期の建造物の設計及び監理は，九州帝国大学建築課で行われたのであるが，農学部要覧（1924）には「建築ニ関係シタル者ハ九州帝国大学技師倉田謙，同技師坂部保治ノ二名」とある．倉田氏は九州帝国大学臨時建築掛が設けられたときに技師（高等官六等）として赴任し，1929年（昭和4年）12月まで初代の建築課長を勤めている．1924年（大正13年）のガステロ（内路）事務所の新築及び1928年（昭和3年）のポロナイスク（敷香）事務所の新築については設計図書に設計者の名前が無いが，倉田氏か坂部氏のいずれかが設計に関わられたものと思われる．

1931年（昭和6年）のポロナイスク（敷香）事務所の標本室増築当時の建築課長は，倉田氏の2代後の各務一雄氏で，設計図の図題枠の課長の欄には各務の，設計及び製図者の欄には萱島の印が押してある．

5.4.2.　箱崎地区に現存する同時期の木造建築

箱崎地区に残っている最も古い木造建築は貝塚門の警備員詰め所（31 m²）で，1922年（大正11年）に農学部門衛所として作られたものである．農学部構内にある旧演習林事務所（現在の熱帯農学研究センター）は1927年（昭和2年）に，また学生集会所「三畏閣」（457 m²）は1937年（昭和12年）に建築された．ポロナイスク（敷香）の標本室の雰囲気は，農学部構内に残る旧演習林事務所に最も近かったのではないだろうか．

6. 一事務官の見た旧樺太演習林

6．1．はじめに

九州大学演習林は，農学部の開設に先立つこと7年，本学開学の翌年の1912年（大正元年）12月に大学における基本財産林として，当時の樺太庁からの移管により樺太演習林が設置されたのをもって始まる．同年同月に朝鮮演習林（のち南鮮演習林と改称）を設置，翌大正2年12月には台湾演習林が設置された．

1919年（大正8年），農学部が設立され，1922年の林学科発足に伴い，大学演習林は農学部附属演習林となったものであるが，当時有していた樺太，朝鮮，台湾の各演習林はいずれも外地にあり，福岡市からは距離的にも遠く，学生，教官の実習林としては不便であった．そこで，1922年（大正11年）9月の早良演習林（福岡市西区）の設置に続いて，同年10月には糟屋郡篠栗町及び久原村（現久山町）に糟屋演習林（現福岡演習林）が設置された．

その後，1926年（大正15年）1月には北鮮演習林が設置され，同年から樺太演習林は収益を上げるようになった．例えば1935年の演習林の年収入は支出の倍以上であって，当時は，九州大学だけの独立した特別会計であり，年度末の剰余金は資金として繰り入れ，翌年度に繰り越し使用ができた．例年，この演習林の資金は，医学部の設備拡充等のために用いられていたが，演習林の拡充整備にも充てられるようになった．1939年（昭和14年）の宮崎演習林（宮崎県椎葉村）の設置はその結果である．

以上戦前における演習林は，北は樺太から南は台湾までの亜熱帯林，暖帯林，温帯林及び亜寒帯林にわたる総面積4万7千ha余の広大かつ多種多様な森林植生を有していたが，第二次世界大戦の敗戦により外地演習林は全て消滅し，演習林の総面積はわずか3千4百ha余に激減した．

特に，北方林業研究の拠点であった樺太，北鮮の両演習林を失くした痛手は大きく，これまでの北方林業研究の蓄積を無駄にすまいと，新たな演習林の獲得に努めた結果，1949年（昭和24年）2月に北海道演習林（北海道足寄町）の設置となって結実した．これによって，演習林の総面積は7千百ha余となり，現在に至っている．北海道演習林は平成11年に創設50周年を迎え，8月に総長，事務局長，前農学部長をはじめとする関係者を招いて盛大に記念式典を挙行したところである．

6．2．サハリン訪問の経緯

西暦2002年には，演習林は創設90周年，現存の福岡演習林設置から80周年を迎えることとなる．そこで，演習林では，2002年を期して福岡演習林創設80周年記念事業として，演習林80年史の発行並びに旧外地演習林の実態調査，旧外地演習林の後継組織を含む東アジア地域の関係者による共同研究及び国際シンポジウムの開催を計画している．

今回の九州大学演習林研究部によるサハリン訪問は，この福岡演習林創設80周年記念事業の一環として，演習林が，戦前外地に有していた演習林の森林がその後，どのような

変遷をたどって今日に至っているかを，実際に現地に出向いて検証しようとするものである．演習林ではすでに1996年8月に旧南鮮（現韓国），1997年4月には旧台湾演習林を訪れて同地の森林実態調査を行っており，引き続いて，1999年9月5日から13日までの旧樺太演習林（現ロシア国・サハリン州）の森林実態調査に，小川研究部長（教授）以下6名の訪問団を派遣することとした．以下は，この訪問団の一員として同行することとなった一事務官の見た旧樺太演習林訪問の印象を綴ったものである．

6．3．サハリンの歴史と現状

かつて九州大学演習林発祥の地である旧樺太演習林があったサハリン島は，北海道の北の北緯45度54分から54度24分に位置し，南北約948 kmにわたる細長い島である．現在は，ロシアの極東，クリール諸島とともにサハリン州を構成し，面積は約74400 km^{2}で北海道とほぼ同じ広さである．宗谷岬からサハリン島最南端のクリリオン岬まで約43 kmの距離にある．対馬から朝鮮半島まで約50 km，沖縄県八重山郡与那国島から台湾島まで約100 kmであるから，地理的には，日本からみてサハリンは一番近い外国ということになる．でありながら，一般の日本人にとってこれまでサハリンは遠い異国の地であった．戦後，半世紀近くもの間冷戦状態が続く中，サハリンは旧ソ連国防の第一線として位置付けられ，ために外国人の立入禁止区域に指定され，その間の実態は「鉄のカーテン」の下，秘密のベールに包まれていたからである．しかし，冷戦が終結し，旧ソ連のペレストロイカ政策により1989年3月にサハリンの外国人立入禁止区域指定が解除され，同時に観光ツアーが解禁されるに及んで，サハリンは日本から一番近い隣国として，再び日本人の前にその姿を現した．

サハリン島には，もともとニヴヒ（ギリヤーク），ウィルタ（オロッコ），アイヌなどの少数先住民族が住んでいた．最初は，これら先住民族と中国との間で，次いで，17世紀半ばにほとんど同じ時期にこの島に到達したロシアと日本が，18世紀末にいたり，本格的に進出するようになると，サハリン島は，度々，この両者の間の係争の地となった．

1855年（安政2年），日露和親条約（下田条約）が結ばれ，両国の間に国境が画定され，千島列島に関しては，ウルップ島以北をロシア領，エトロフ島以南を日本領と定めたものの，サハリン島に関しては，「界を分たず是までの仕来り通り」とし両国雑居の地とした．その後，1867年（慶応3年）に「日露間樺太島仮規則」が交わされるが，ここでも結果は同じ「両国の共有」であり，両国民の全島における居住の自由を認めたものであった．したがって，当時のサハリン島は，日本人，ロシア人，アイヌ人等の先住諸民族が奇妙な雑居状態にあり，現地では，民族間の衝突や紛争が絶えなかった．とくに，日本とロシアとの対立・抗争は年を追って多発，激化の様相を呈してきた．

1868年に成立した明治新政府は，大国ロシアを相手に紛争を続けるよりは，まず北海道の開発に全力を注ぎ，国力の充実を図る方が先決として次第にサハリン島放棄に傾いた．サハリン島の帰属が決まるのは1875年（明治8年）の「樺太千島交換条約」によってである．これによってサハリン全島がロシア領となり，代りにウルップ島以北の全千島が日本領となった．かくしてサハリン島は，1855年～1875年の共同領有を経て，ロシアの領有するところとなったが，その後も，両国の力関係をそのまま反映して，1875年～1905

年のロシア領有，1905年～1945年の日本領有，1920年～1925年の日本による北半分の占領（ロシア革命の際の干渉戦争による），1945年以降のソ連による領有と続いた．

1951年のサンフランシスコ講和条約で，日本はサハリン島の領有権を放棄したが，最終的にこの島がどこの国に帰属するのかは，この会議では決められなかった．ソ連がこのサンフランシスコ講和条約に参加していなかったからである．

その後，日ソ間の国交は回復したが，今日に至るも日ロ間に平和条約は締結されていない．したがって，現在，サハリン全島がロシアの施政下にあるものの，サハリン島の北緯50度線以南については，国際法的には，今なお帰属先未定の土地ということになる．

6．4．サハリン訪問の行程

6.4.1. サハリンの空の玄関口・ユジノサハリンスク

9月6日（月） 前夜，函館に集合したサハリン訪問団の一行6名は，12時，函館空港を発ち，アエロフロート社の44人乗りプロペラ機で空路ユジノサハリンスク（豊原）へと向かう．約2時間後，16時（現地時間，日本とサハリンとでは2時間の時差がある．以後，時刻の表示は全て現地時間）にユジノサハリンスク空港着．自動車でユジノサハリンスク市内のホテル「サハリンサッポロ」へ．夕食前の時間を利用して市内散策．日本車がひしめいている碁盤の目を思わせるその街並みは，ちょうど小札幌といった雰囲気である．ユジノサハリンスク駅前のレーニン像が撤去されずにそのまま残されているのに驚く（図6-1）．夕食はホテル内のレストランにて．

ユジノサハリンスクは日本領時代の豊原であるが，日露戦争以前のロシア領時代は「ウラジミロフカ」といい，当時はサハリンの南端から北へ向かう街道沿いに，わずかな家並があっただけの寒村の一つに過ぎなかった．豊原は日露戦争後のポーツマス講和条約でサ

図6-1 ユジノサハリンスク駅前のレーニン像

ハリン島南部が日本領となったのちに，中央政庁の所在地として，ほとんど真っ白の地図の上に設計図を引いて造ったいわば人工都市であった．その後，第二次世界大戦での日本の敗戦とともにソ連領サハリン州となった後も，その州都としてサハリンの政治，経済の中心としての機能を維持し，現在，人口20数万でさらに増加中である．

日本の領有当時，南サハリンの行政的首都を何処に選定するかについて，コルサコフ（大泊）とウラジミロフカの二つが候補に挙がった．内地及び東西沿岸との交通容易で気候温暖な良港であり，向背地がすぐ丘陵地帯であるために市街地の拡大には無理があるという難点を抱えながらも，すでに都市としての体裁を整えていたコルサコフを排し，平野の中心部に位置するとはいえ，コルサコフに比べれば気候寒冷にして，港湾を隔て海岸との交通不便な一寒村に過ぎなかったウラジミロフカに中央政庁を置き，南サハリン開発の拠点とした明治の人は，さすがに炯眼というべきか．

9月7日（火）　午前，サハリン営林局（ゲナジ・チェクルダイエフ局長）を表敬訪問．局長，コチェルニコフ副局長，ポポフ部長による明日からの全行程の説明及びサハリン営林局管内の事業概要の説明と質疑応答．ポポフ部長には明日からの全行程に同行していただけるという．大学の調査団とはいえ，初めて訪れた我々にそこまでの配慮をしていただけるとは，ただただ感謝するのみ．

14時過ぎに市内のレストランで昼食．その量の多さ加減に呆れる．聞けば，ロシアでは昼食に一番の時間と金をかけて豪勢だという．さもありなん．郷に入りては何とやらとばかり，無理して食べてみたが，お陰で，昼食時間が遅かったこともあり夕食を抜く羽目になった者が何人もでる始末である．

昼食後，腹ごなしをかねて食料の買い出し．翌日は目的地のスミルヌフ（気屯）まで一日中列車に乗っているとかで，そのための買い出しである．さらに書店を数軒回ってサハリンの地図等を入手の後，サハリン州郷土博物館へ．

この郷土博物館は，1938年の建造になる樺太庁博物館がそのままの形で残されており，当時流行の帝冠様式の建築だという（図6-2）．もうすでに還暦を過ぎた貴重な日本時代の建物である．玄関前には1対の狛犬の像が立っており，三階の塔屋が日本式城郭建築の

図6-2　サハリン州郷土博物館

櫓様式と併せ，館内には日本的ムードが色濃く残っているようである．建物の中には，サハリン州の自然，歴史，文化などの資料が展示されている．また，北緯50度線の旧日ソ国境に置かれていた菊の紋章と双頭の鷲を表裏に配した標石も展示されていた．しかしながら，日本領時代40年間の歴史と開発の実績（例えば，国・私鉄合せて800 kmにも及ぶ鉄道の敷設）等については意識的に欠落させているのではないかと感じたのは，はたして筆者一個人だけの感慨であろうか．

6.4.2. 半世紀ぶりに旧樺太演習林へ

9月8日（水） 8時，ユジノサハリンスク駅発の列車でスミルヌフ（気屯）へ向かって出発．朝からずっと雨である．列車は，日本時代に敷設された狭軌鉄道の路線をこれも日本製の中古のディーゼル車両で東海岸線沿いに一路北へと向かう．

途中の駅で何度か停車したが，停車時間がどの程度なのか判らないのでうっかり駅構内にも降りられない．夕刻にポロナイスク（敷香）で停車．ここでは結構停車時間が有るらしく，他の乗客がゾロゾロ駅構内に降りていくのを見て，我々も降りてみる．雨はいつの間にかあがっていた．中に一人自転車を抱えて降りてきた日本人らしき若者と出会う．声を掛けてみると，東京から一人で自転車旅行をしてきたという．最終目的地は，旧日ソ国境線でその跡地を自分の目で確かめるためにここまでやって来たという．サハリンに着いたあと4人組の強盗に遭い所持金を半分ほど盗られたが，そのまま旅行を続けて，今日はこのポロナイスクで泊まり，翌日さらに自転車で北へ向かうという．
通訳のミハイル氏は久し振りに母国の人達に逢えて嬉しいのだろう．列車に乗っていた間中，同行のポポフ部長と話していた．

午後8時前ようやくスミルヌフ駅着，所要時間12時間弱．駅にてスミルヌフ営林署のビクトル・コベルニコフ署長，ラマン主任林務官の出迎えを受け宿泊先へ案内してもらう．休む間もなく営林署のログハウスでの歓迎食事会に臨む．

飲物は冷えてないビールとウォッカである．小生，ビールはすぐ腹がふくれて苦手なのでウォッカをいただくが，日本で何度か飲んだことのあるウォッカと違って，そんなにきつくはない．ウィスキーを生で飲んでいるようなものである．ロシア人のとくに男は，酒好き，女好き，議論好きとは聞いていたがやはり相当なものである．とにかく陽気だ．何時果てるとも知れない歓迎の宴が続いたが，翌日は旧演習林の森林調査を控えているからと，ようやく解放してもらったのは12時をはるかに回っていた．

いよいよ明日は，九州大学演習林関係者が，引き揚げ後初めて，実に50数年ぶりに演習林発祥の地である旧樺太演習林の地に立つという，記念すべき日になるということを考えたら興奮してなかなか寝付けない．

9月9日（木） 10時，スミルヌフ営林署を訪問．当営林署管轄の事業説明及び質疑応答の後，戦後ずっと保管されていたカタカナで「盗伐スルナ」などと書かれた当時の演習林の管理標識を，5種類15枚程度見せてもらい，そのうちの2枚を記念に頂戴し日本に持ち帰ることとした．その後，ラマン主任林務官の案内でブユクリ（保恵・旧樺太演習林の作業所があったところ）へ向かう．出迎えのブユクリ担当区主任イワン氏の案内で，旧作業所があったと思われる場所へ出向き，作業所の当時の写真を見せながら所在を尋ねたところ，イワン主任の談によれば，「写真に写っている作業所らしき建物には確かに記憶

がある.」さらに，暫く考えた後，「20年位前までは確かにあったが，その当時に襲来した台風による土石流でその建物のあった一帯は全て流失した.」とのことであった．そして，「確かこのあたりにあったように思う.」と旧作業所があったとおぼしき場所へ案内してくれた（後で，その台風は1981年8月のフィリス台風と判明．この台風による当時のその地区の死者は13名を数えたという.）．我々は，案内された場所で何か当時の痕跡でも残ってはいないかと，辺り一帯を探し回ったが徒労であった（図6-3）.

その後，旧林地跡地を見て回ったが，エゾマツ，トドマツ（直径70 cm程度）の優良林があった平地一帯は戦後ほどなく伐採され，その後国営の農場，牧場として開発，造成されたとのことであるが，その後放置され，現在は草地化して僅かに200頭程度の牛が放牧されているに過ぎず，かつて九州大学の財政に大いに寄与した優良林は跡形も無くなっていた．しかしながら，農地化した奥地にはトドマツの天然更新を行っている林地がわずかに残っており，100年生以上のトドマツや日本時代の伐根の跡も見られ，わずかに往時を偲ぶことができた．さらに，伐採した木材を運んだ森林鉄道敷設跡地を調査するも，一部に盛り土が残っているのみで枕木などの遺物は皆無だった.

旧林地跡の野外で昼食のあとツンドラ地帯を見学後，ブユクリ担当区イワン主任のお宅へ伺う．何でも，中学生の娘さんが前月，青森市にホームステイで1週間程滞在して帰ってきたばかりで，今日，日本から大学の森林調査団が来ると聞いて，今日は学校へは行きたくない，一緒に調査して回りたいと駄々をこねたとかで，それではということで学校の下校時間を見計らってこちらから訪問した次第である.

さらに，スミルヌフへ戻り約70 haの苗圃地を見学して旧日ソ両軍激戦地跡を回り，3年前の1996年11月1日に建立された「樺太・千島戦没者慰霊碑」の前で慰霊の後，宿泊先へ帰ったところ，昨日ポロナイスクで会った自転車旅行中の若者と再会する．どうやらここはスミルヌフで唯一の宿泊所らしい．荷物の番を若者に頼んで，団員一行は再び夕食会場の営林署ログハウスへ．営林署長から孤児施設（ソ連邦崩壊後，施設数，収容者数とも増加の傾向にあるとのこと）の技能訓練の一環として製作されているエゾマツの木工製品をお土産として全員にいただく．今日一日，森林実態調査で行動を共にしてきたためか，前夜にもまして賑やかな懇談の夕べとなり，当方は炭鉱節を皆で踊り，ロシア側もその返

図6-3　旧樺太演習林作業所跡地での記念撮影

礼としてコサックダンスを披露してくれた．実に楽しい夜であった．12時過ぎに宿泊先に戻り，一人で待っていたくだんの若者と日本から持参のウィスキーで再会を祝してまた飲み，床に就いたのは3時頃であった．

6.4.3. ポロナイスクと岡田嘉子のソ連越境事件

9月10日（金） 朝食後，スミルヌフを出発．旧演習林事務所のあったポロナイスク（敷香）へと向かう．今日は雲一つない快晴で，空が抜けるように青い．このため，途中ブユクリを通りかかった際に，昨日調査した旧樺太演習林の林地跡に今一度立ち寄って，旧林地の遠景及びそれを背景にしての記念撮影の後，旧樺太演習林に別れを告げた．

昼過ぎにポロナイスク着．ポロナイスク営林署のウラジーミル・スミルノフ署長の出迎えを受ける．ポロナイスクは，サハリン北部に源を発し，「樺太アマゾン」といわれたポロナイ（幌内）川の河口に開けた工業都市で，日本時代から，製紙，パルプ業を中心に栄えてきた町である．昼食後，スミルノフ署長の案内で旧演習林事務所があったとされる場所へ案内してもらう．日本から持っていった旧ポロナイスク市街の見取図及び建物の写真と，スミルノフ署長が手配してくれたポロナイスクの日本時代の市街地図を頼りに聞き込みを行うこと30分余，ようやく，近所に住む元・水産物加工の工場長をしていて，現在は年金生活者だというアレクセー・クズニフスキー氏の証言により，現在は港湾事務所の船体修理場，資材置場として利用されている一帯が，旧演習林事務所跡であることが判明．建物の写真に見覚えがあるという．クズニフスキー氏によれば，旧事務所は，戦後も，「漁師会館」として1976年頃まで利用され，その後，1980年に取り壊されたとのことであった．早速，その場所へ行き，何か痕跡でも残っていないかと一帯を探して回ったが，ここでも，それらしきものは何も発見できず，ただ歳月の非情さのみを思い知らされた．

その後，今はもう操業されていないミンク養殖場を横に見ながら，市民に開放されている海岸林を見学，散策後，宿泊所にあてられている旧公務員宿舎らしき集合住宅へ．夕食は，ポロナイスク唯一のレストラン「ブリーズ」——海の爽やかな風——にて．

ここ，ポロナイスクは，前日まで2日間宿泊したスミルヌフ及び昨日訪れた旧演習林作業所があったブユクリとともに，日本時代は旧敷香支庁管内にあり，1938年1月3日に起きた旧日ソ国境線史上最大の衝撃的な事件，つまり，当時の有名女優であった岡田嘉子と新進の左翼演出家・杉本良吉が雪の日ソ国境をソ連に越境するという一大事件の舞台でもあった．この旧日ソ国境は，有史以来わが国が持った初めての陸の国境線であったが，当時のサハリン島は一種の非武装地帯であったらしい．というのも，日露戦争後のポーツマスにおける講和条約でサハリン島及びその周辺の島では，軍事的工作物及びその類いのものはお互いに設置せざる旨の取決めがなされ，1939年のノモンハン事件まで日本はサハリンに軍隊を置かず，国境付近に少数の武装警官を配置しているに過ぎなかったからである．これは当時のロシアにおいても同様の事情であったようだ．したがって，この間，第二次大戦のソ連軍の参戦まで40年間，岡田嘉子と杉本良吉両名による越境事件を除いては，この旧日ソ国境線は，少なくとも表面的には平穏そのものに推移したかのように見受けられる．では，この岡田，杉本両名の越境事件についてちょっと長いが，当時の新聞（1938年1月5日付け「東京朝日新聞」）の記事を引用してみる．

岡田嘉子謎の行方

杉本良吉氏と同行　樺太で消える　奇怪・遭難か情死か

【豊原電話】女優岡田嘉子さん（38）と新協劇団演出家杉本良吉こと吉田好正氏（32）は旧臘三十日来島し途中豊原市《ユジノサハリンスク》に一泊，大晦日夜終列車で敷香町《ポロナイスク》に着き山形屋旅館に投宿，吉田氏は本名を用い，嘉子さんは吉田よし子（30）と偽名しオタツ土人部落等を見物，二日朝国境の警備員慰問に行くとて生魚等の慰問品を持ち乗合自動車で保恵《ブユクリ》まで行きそこから馬橇に乗って気屯《スミルヌフ》に着きそこに一泊し翌三日朝再び馬橇で日ソ国境の半田警部補派出所を訪れて慰問の言葉を述べ帰途に就いたが半田沢《ユジノハンダサ》を過ぎて間もなく両名は歩いて行くとて馬橇を降りたまま同夜気屯に帰らず行方不明となった．嘉子さんは父がかつて大泊《コルサコフ》の新聞社にいたことがあって懐しいから樺太の冬を見物し今度撮影するアイヌ・オロッコの映画の参考資料にすると敷香の旅館においても極めて朗かであったが然し零下卅度の屋外に野宿等は絶対に出来ず，二人の歩き出したところから国境までは僅一里半しかなく，警察等では心中や遭難ではないと見，寧ろ吉田好正氏の思想傾向から推して国境慰問に名を籍り越境したのではないかと樺太庁特高課では重視し敷香署と協力，極秘に両氏の行方を探している．山形屋旅館には現金三十円と身の廻りの物が少し入っているトランクとが残してある．

この記事から，サハリン島に来てからの二人の足跡を追ってみると，

1937年12月30日　サハリン島，来島．ユジノサハリンスク（豊原）泊．
12月31日　ユジノサハリンスク発，夜行列車でポロナイスク（敷香）へ．車中泊．
1938年1月1日　ポロナイスク着，山形屋旅館泊．
1月2日　ポロナイスク発，ブユクリ（保恵）を通ってスミルヌフ（気屯）着（泊）．
1月3日　スミルヌフ発，ユジノハンダサ（半田沢，半田警部補派出所）へ．その後，旧日ソ国境線を越境．

ということになる．

その後の二人の消息については，よく知られているとおりである．二人が越境を敢行した1938年から1939年にかけてのソ連といえば，スターリンによる粛清の嵐が吹き荒れていた時代である．それは，政治や軍部の世界にとどまらず，文学や音楽，演劇の関係者にも及んでいた．正に時期が悪すぎたといえる．越境後，二人はソ連当局によってスパイの容疑で逮捕され，翌年，杉本は銃殺され，岡田は10年の禁固刑に処せられ服役した．彼女が，モスクワ放送の日本語放送に登場し，その生存が伝えられたのは時あたかもスターリンの死（1953年）前後のことである．もっとも，岡田，杉本両名のソ連越境後のことも含めて，スターリン時代の大粛清の真相が明らかになるのは，フルシチョフの「スターリン批判」で有名な1956年のソ連共産党第20回党大会の秘密報告を経て，所謂「雪解け」の時代を迎えてからさらに後のことである．このスターリンによる恐怖政治，血の粛清の

実態がもう少しでも早く明らかになっていたなら，戦後の日本の政治，とくに左翼運動も幾らかは違った形態をとっていたのではなかろうか．

それはともかくとして，岡田嘉子が再び日本の土を踏み，女優岡田嘉子としても復活を果たしたのは，1972年11月，実に34年ぶりの帰国であった．

6.4.4. さらば旧樺太演習林よ，またいつの日か

9月11日（土） 朝食後，かつての旧王子製紙敷香工場跡を見学．現在，日本時代の製紙工場は，工場自体は残っているのだが，そのほとんどが生産停止の状態にあるという．その後，車で20kmほどのガステロ（内路）へ行く．ここは，ポロナイスクに演習林事務所を設置する前に事務所を置いていた場所で，ポロナイスクに新事務所設置後も引き続き使用されていた．ガステロの旧事務所もその所在地を特定できなかったが，ガステロはこれまでに訪問したサハリンの他の町と違って，町のあちこちに日本時代の住居が取り壊されずに放置されており，もしその痕跡が残っている旧樺太演習林の建物があるとすれば，このガステロの旧事務所が一番可能性が高かったのではないだろうか．当初の調査予定に入っていなかったために準備不足であったことが悔やまれる．

その後，同行のポポフ部長が以前住んでいたというマカロフ（知取）へ行き，日本時代の神社や旧王子製紙工場跡を見学．昼食をとるようなドライブインなどはないので，各自売店で昼食分を購入，途中の海岸にて昼食．近くの海岸へ流れ込む小渓流で見たカラフトマスの遡上に感激する．

夕刻，ユジノサハリンスクのホテル「サハリンサッポロ」へ帰着，宿泊．

9月12日（日） 午前，日本時代の旧北海道拓殖銀行豊原支店を利用したサハリン州立美術館を見学，民芸品や琥珀などの土産品を購入後，コルサコフ（大泊）へ．ここは，日本時代に北海道の稚内と結んだ旧稚泊連絡船の発着場所であり，かつてのサハリンの玄関口であった．ソ連時代は軍港であったが，ペレストロイカ後，1991年には国際貿易港として開放され，チャーター船ながら懐かしの「稚泊航路」として復活した．その後，1995年には定期船に昇格し，現在，夏期（5月～9月）の間だけながら，3日に1回往復便が就航している．

南下して日露戦争の際の日本の遠征軍上陸記念碑を見学．この碑は日本軍が，奉天の陸軍大会戦及び日本海の対島沖海戦で遠来のバルチック艦隊を破り勝利をおさめたものの，その後，日露双方に嫌戦気分が高まり，ポーツマスの講和会議に臨むにあたり，講和条件を有利に進めるため，当時ロシア領だったサハリン全島を支配下に置くべく，日本軍が最初に上陸した地点を記念して，戦後日本人により建立されたものである．現在は，引き倒されてはいるものの，撤去もされずにそのまま放置されている（図6-4）．

その後，トゥナイチャ湖，イズメンチヴォイエ湖を見学の後，夕刻，コルサコフ営林署のゲストハウスでの送別会に臨む．サハリン営林局チェクルダイエフ局長，コチェルニコフ副局長，ポポフ部長，コルサコフ営林署長ルキアリンコ氏との懇談．サハリン最後の夜，いよいよ明日は日本へ帰るとあって，皆，飲む程に元気がでてきたものとみえ，痛飲を重ねる．途中，一時中断してサウナに入り湖に入って懇談を繰り返すこと数度に及び，宴が果てたのは都合7,8時間もたった頃であったろうか，時間はよく覚えていない．ふらふらになりながら，ようやくユジノサハリンスクへの帰途につく．

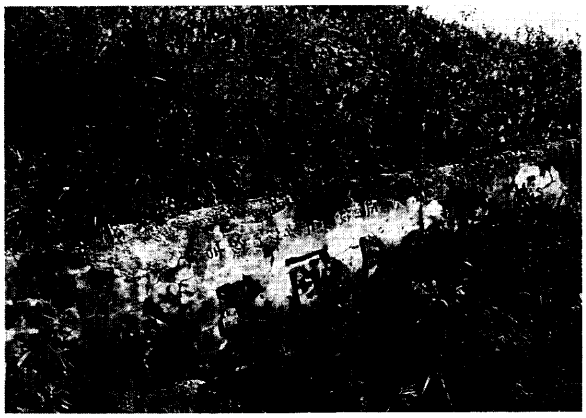

図6-4　引き倒されたままの遠征軍上陸記念碑

6．5．まとめ

サハリンの諸都市における都市形成はそのほとんどが，製紙，パルプ工場の建設に伴ってなされたものである．白紙に近い地図の上に設計図を引いて造った人工都市であるユジノサハリンスク（豊原）や日本領有時，すでに都市の体裁をなしていたコルサコフ（大泊）などごく一部の都市を除けば，これまでに見てきたポロナイスク（敷香），マカロフ（知取），ドリンスク（落合）をはじめとして殆ど全ての都市は製紙，パルプ工業の発達と不可分の関係にあった．しかし，製紙，パルプ工業は一面では森林破壊産業でもあった．

サハリン島が，1875年の全島ロシア領有以来，日本，ロシア両国の力関係をそのまま反映して，その主権者が代わる度に，その森林資源があたかも戦利品を漁るように乱伐されたのは，当時の時代背景を考えればある程度はやむを得なかったものといえよう．しかしながら，実はそれ故にこそ当時大学演習林が広大な森林を有していたことに意義があったのである．

九州大学が当時の樺太庁からの移管により，サハリンに約2万ヘクタールにも及ぶ樺太演習林を設置した大正初年の頃，ほとんど時期を同じくして，東京大学，京都大学，北海道大学でもそれぞれ2万ヘクタールほどの森林を樺太庁から移管を受けて演習林を設置している．すでに，農学部林学科の設置をみていた東京大学や，札幌農学校を前身にもつ北海道大学はともかくとして，林学部（科）はいうに及ばず農学部の設置すら未だこの時期には計画段階だった京都大学，九州大学にまでいずれ林学部（科）を設置するという条件でそれぞれ約2万ヘクタールを移管した当時の樺太庁首脳や林務行政に携わった人々には敬意を表したい．

想像するに，樺太庁は（植民地）行政の官庁であるが故に政治や経済界関係の圧力が入り易いものである．せっかく，行政官庁の方で森林の育成，保護に意を注いでも，利権にさとい政治，産業界からの圧力に抗し，森林行政を全うするのは容易ではない．欧米のように大学の管理下に置いておけば，固より大学は，学問の府にして，政党や産業界の魔手より超然たり得る．こう考えて，すでに農学部林学科の設置をみていた東京大学，北海道

大学の他に，いずれ遠からず林学部（科）を設置するからという条件で，京都大学，九州大学にまで移管したものと思われる．ちなみに，当時の樺太庁長官は平岡定太郎（三島由紀夫の祖父にあたる）長官であった．

7．おわりに

経済的，社会的にも混乱していると見受けられたロシア・サハリンであったが，訪問先の営林局の局長，署長をはじめ林務官の方々は，森林管理の基本原理を十分に認識し，森林を保全し，林業を活性化させ経済状態をよくすることに心血を注いでおられ，同じく森林を愛する仲間として，意気投合した．北方天然林は，ツンドラ地帯の気候環境保全の重要な要因であることが少しずつわかりはじめている．経済混乱に巻き込まれて，乱伐，火災による焼失など，取り返しのつかない森林荒廃を来たさないように，北海道大学に続いて，九州大学においても，日ロ共同の調査研究交流が望まれるところである．

最後に，今回の訪問でお世話になったロシアの方々に，スパシーバ！！

（1999年12月15日受付；2000年2月25日受理）